

CLAIR REPORT No.433

オセアニア地区を中心としたラグビーワールドカップの歴史とその効果

Clair Report No. 433(May , 2016)

(一財)自治体国際化協会 シドニー事務所



一般財団法人

自治体国際化協会

「CLAIR REPORT」の発刊について

当協会では、調査事業の一環として、海外各地域の地方行財政事情、開発事例等、様々な領域にわたる海外の情報を分野別にまとめた調査誌「CLAIR REPORT」シリーズを刊行しております。

このシリーズは、地方自治行政の参考に資するため、関係の方々に地方行財政に係わる様々な海外の情報を紹介することを目的としております。

内容につきましては、今後とも一層の改善を重ねてまいりたいと存じますので、御叱責を賜れば幸いに存じます。

本誌からの無断転載はご遠慮ください。

問い合わせ先

〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-7 相互半蔵門ビル

(一財)自治体国際化協会 総務部 企画調査課

TEL: 03-5213-1722

FAX: 03-5213-1741

E-Mail: webmaster@clair.or.jp

はじめに

来る 2019 年には、我が国において、アジアで初めてのラグビーワールドカップが開催される。今次イングランド大会での日本代表チームの大活躍によりラグビー競技への国民的な関心が高まっている中、次回大会の開催地自治体のみならず、外国代表チームのキャンプ地の招致や大会を契機とした国際交流を進めようとする多くの自治体が、膨大かつ詳細な準備を進めつつあるものと思われる。

本編は、当事務所の担当国であるオーストラリアとニュージーランドでの 1987 年、2003 年及び 2011 年の 3 次にわたるラグビーワールドカップについて、その概要及び経済的効果を含めた成果等についてまとめたものである。併せて、当地で盛んなラグビー関連競技の概説も行っている。

幸いにも、1987 年第 1 回大会は両国の共催であったため、2003 年第 5 回大会ではオーストラリア、2011 年第 7 回大会ではニュージーランドがそれぞれ 2 度目の開催となり、前回大会の経験及び反省を踏まえた運営が行われた。本編においては、これら各大会の公式記録、当時の資料に加え、運営関係者へのインタビューによる成果も盛り込むことができた。

ラグビー最強豪国である両国のラグビーの技術に教わる点が多いが、大会運営についても本編での事例を参照していただき、ラグビーワールドカップのみならず、大規模スポーツイベントにおいて、今後の自治体での政策立案の一助となれば幸いである。

(一財) 自治体国際化協会シドニー事務所長
上坊 勝則

(注) 表記について

- ・ニュー・サウス・ウェールズ州・NSW 州
- ・ビクトリア州・ VIC 州
- ・クイーンズランド州・ QLD 州
- ・南オーストラリア州・ SA 州
- ・西オーストラリア州・ WA 州
- ・タスマニア州・ TAS 州
- ・北部準州・ NT 準州
- ・首都特別地域 (キャンベラ)・ . . ACT

目 次

概 要

第1章 ラグビーワールドカップの歴史と概要	1
第1節 RWCの概要	1
第2節 2019年RWC日本大会の概要	4
第3節 1987年第1回RWC（ニュージーランド・オーストラリア大会）の概要	8
1 開催前の状況	10
2 大会期間中の状況	11
第4節 2003年第5回RWC（オーストラリア大会）の概要	13
1 開催前の状況	15
2 大会期間中の状況	15
第5節 2011年第7回RWC（ニュージーランド大会）の概要	19
1 開催前の状況	21
（1） イーデン・パーク等の状況	
（2） 担当者へのヒアリング（イーデン・パーク）	
2 大会期間中の状況	24
（1） ファンゾーン（Fan-zones）	
（2） REAL New Zealand Festival	
（3） ボランティア	
（4） ビジネスミーティング	
（5） その他	
第2章 ラグビーワールドカップによる経済効果	29
第1節 歴代RWCと前後のスポーツイベント等	29
第2節 2003年オーストラリア大会が経済に与えた影響	31
1 チケット販売数	31
2 国外からの訪問者数	32
3 国外からの訪問者による支出	33
4 国内からの訪問者による支出	35
5 産業、雇用、財政への影響	36
（1） 経済需要面	
（2） 雇用面	
（3） 政府の財政への影響	
第3節 2011年ニュージーランド大会が経済に与えた影響	38
1 訪問者数	38
2 国外からの訪問者	39

3	国外からの訪問者による支出	41
4	産業、雇用、財政への影響	42
第3章	オーストラリアにおけるラグビーの人気と競技の種類	43
第1節	スポーツ観戦と活動	43
1	スポーツ観戦	43
2	運動・スポーツ活動	45
第2節	オーストラリアで行われているラグビー競技の種類	46
1	ラグビー・ユニオン	46
	(1) 歴史	
	(2) 主なルール	
	(3) 代表的な国内試合	
2	ラグビー・リーグ	47
	(1) 歴史	
	(2) 主なルール	
	(3) 代表的な国内試合	
3	オーストラリアン・フットボール	49
	(1) 歴史	
	(2) 主なルール	
	(3) 代表的な国内試合	
	参考文献	51
	おわりに	52

概 要

本稿ではオセアニア地区で開催された、ラグビーの世界的な大会であるラグビーワールドカップ（以下、RWC）の歴史について、当時の様子や経済効果等を中心に記述することを目的とした。

大きく以下のような特徴をもって歩んできた。

- ・ RWC の記念すべき第 1 回大会が、1987 年にニュージーランドとオーストラリアの両国で開催された。第 1 回大会に続き、2003 年にオーストラリアで第 5 回大会、2011 年にニュージーランドで第 7 回大会が開催された。
- ・ 大会開催に伴いスタジアム改修や交通施設等のインフラ整備が進んだ。また、国内外からの訪問者をもてなす部分の対応も行われた。
- ・ 国外からの訪問者の長期間の滞在に伴い、宿泊・消費などによるホスト国への経済効果が生み出された。
- ・ ニュージーランドとオーストラリアの両国では、最も人気のあるスポーツとして、日頃からラグビー観戦が非常に盛んである。両国での RWC 開催時も、両国の熱心なサポーターが行き来して大いに盛り上げた。

なお、本稿は、2004 年 6 月にオーストラリア政府 (Department of Industry, Tourism and Resources) が発表した「Economic Impact of the Rugby World Cup 2003 on the Australian Economy – Post Analysis」(URS Finance and Economics まとめ) と、2012 年 12 月にニュージーランド政府 (Ministry of Business, Innovation and Employment) が発表した「The Stadium of Four Million」(KPMG まとめ) からの情報をベースに、Lance Peatey 著「A Complete History of the Rugby World Cup」(2015 年) その他参考になりうる情報を入れながら執筆した。

また、ニュージーランドとオーストラリアに関する資料について、引用するデータや文献等では、必ずしも同じ基準で双方の国を比較することができない場合や片方の国にのみに言及した記述などについては、御了解いただきたい。

第1章 ラグビーワールドカップの歴史と概要



図1-1 シドニーのANZスタジアムの様子¹

第1節 RWCの概要

RWCは、観客動員数及びテレビ観戦者数の規模から、夏季オリンピック、FIFAサッカーワールドカップと合わせて、世界の三大スポーツイベントとも言われているが、ラグビー・ユニオン²のナショナルチーム世界一を決定する大規模な国際スポーツ大会である。初めてのRWCの開催は、1987年にニュージーランドとオーストラリアの2カ国の共催として、両国を会場に行われた。16の国・地域の代表チームが参加し、開催国の一つであるニュージーランドが自国の地オークランドのイーデン・パークで行われた決勝で、フランスを破り初優勝を飾った。直近の開催は2015年にイングランドで第8回大会が行われ、ニュージーランドが史上最多となる3度目の優勝に輝いたところである。また、2019年には日本で開催されることが決定している。

¹ [写真] 筆者撮影（2016年3月）

² ラグビーと呼ばれる競技は、「ラグビー・ユニオン」と「ラグビー・リーグ」に分かれており、チームの人数や試合のルールが若干異なる。オーストラリアでは、さらに「オーストラリアン・フットボール」がある（第3章参照）。本レポートでは、特に注釈がない場合、ラグビーとはラグビー・ユニオンを指す。

表 1－1 RWC の開催状況及び予定

	開催年（期間）	開催国・地域	参加 チーム	優勝 チーム
第 1 回	1987 年（ 5/22 ～ 6/20:30 日間）	ニュージーランド オーストラリア	16	ニュージーランド
第 2 回	1991 年（10/ 3 ～ 11/ 2: 31 日間）	イングランド	16	オーストラリア
第 3 回	1995 年（ 5/25 ～ 6/24:31 日間）	南アフリカ	16	南アフリカ
第 4 回	1999 年（10/ 1 ～ 11/ 6: 37 日間）	ウェールズ	20	オーストラリア
第 5 回	2003 年（10/10 ～ 11/22:44 日間）	オーストラリア	20	イングランド
第 6 回	2007 年（ 9/ 7 ～ 10/20:44 日間）	フランス	20	南アフリカ
第 7 回	2011 年（ 9/ 9 ～ 10/23:45 日間）	ニュージーランド	20	ニュージーランド
第 8 回	2015 年（ 9/18 ～ 10/31:44 日間）	イングランド	20	ニュージーランド
第 9 回	2019 年（ 9/20 ～ 11/ 2:44 日間）	日本	20	

ラグビーの歴史は、ラグビー校(Rugby School)³の生徒であるウィリアム・ウェッブ・エリス(William Webb Ellis)⁴が 1823 年、フットボールの試合中に、ルールに反しボールを拾い上げて走り始めたことが始まりと言われている⁵。その後、1871 年に初めての国際試合がイングランド対スコットランドで行われ⁶、それから一世紀以上経た 1987 年、初のラグビーのワールドカップが開催された。

サッカーのワールドカップ第 1 回大会が 1930 年、ラグビー・リーグ⁷のワールドカップ第 1 回大会が 1954 年などと比較し、ラグビーの開催が遅れていたのは、国同士、クラブ同士、大学同士などの対抗戦を重視し、チャンピオンシップ（優勝者を決める選手権）の導入には否定的な意見が多かったためといわれている⁸。その考え方には、ラグビーはお金を稼ぐための手段としないアマチュア競技という考え方が根強かったことがある⁹。3 カ国以上の国が 1 箇所集まるテストマッチも禁じられていたが、こ

³ イングランド中部にあるウォリックシャー県（Warwickshire）東部のラグビー（Rugby）に現存する学校。現在 11 歳から 18 歳の生徒が学ぶ。（Rugby School website）

⁴ 彼の名前から RWC の優勝トロフィーは「Webb Ellis Cup」と名づけられ、その名が刻まれている。

⁵ このラグビー校で行われていたフットボールが、現在スポーツとしての「ラグビー」として広く呼ばれている。当時フットボールは学校ごとにルールが決められており、ラグビー校でもこの出来事の前は、ボールをつかんで、キックすることは許されていた。トライ、オフサイド、ノックオンという言葉もすべてこのラグビー校のルールが由来。（Rugby School website より）

⁶ David Green, 1987 Rugby World Cup (New Zealand History website : The History Group of the New Zealand Ministry for Culture and Heritage)

⁷ 第 3 章参照

⁸ 一般財団法人日本マネジメントスクール「ラグビー愛・通信」第 1 回「ラグビーワールドカップとは」

⁹ ラグビーは歴史的にアマチュア主義を掲げていたが、1995 年に選手への給与支払いの制限を撤廃し、

れも商業主義につながる可能性があるという認識があったからである¹⁰。

こういった思想がラグビーを取り巻く中（特に北半球の伝統国で）、オーストラリアとニュージーランドが最初に RWC についての具体的な構想を主導した。1983 年オーストラリアが初めての開催について提案し、その数週間後にニュージーランドも同様の提案を行った（実はその時点でお互いの動きを知らなかったが、知ってからは同調していったようである）¹¹。1984 年まで国際ラグビー評議会（International Rugby Football Board）¹²には固く認められなかったが、1985 年 3 月にパリで行われた総会で投票が行われ、RWC の初めての開催が決定した。開催時期はオリンピックやサッカーワールドカップ等の世界的スポーツイベントの開催時期を避け、1987 年に行われることとなった（オリンピック等と同様に 4 年に一度の開催）。

オセアニア地区ではこれまで 1987 年の第 1 回大会をはじめ、2003 年にオーストラリアで第 5 回大会、そして 2011 年にニュージーランドで第 7 回大会と三度の RWC が開催されている。

プロ選手が初めて解禁された。

¹⁰ 杉谷健一郎「500 年前のラグビーから学ぶ」

¹¹ Norman Tasker, Rugby World Cup 1987 ABC guide

¹² 当時は International Rugby Football Board (IRFB) だったが、1998 年に International Rugby Board (IRB)、2014 年 11 月に World Rugby へ改称された。（参照：Keith Young, The Complete Rugby Union Compendium（2015 年））

第2節 2019年RWC日本大会の概要

オセアニア地区で行われた RWC についての記述の前に、今後日本で開催される RWC について確認しておきたい。

2009 年 7 月、国際ラグビー評議会によって 2015 年の第 8 回大会がイングランドで開催されることが発表されたが、同時に、2019 年の第 9 回大会が日本で開催されることも明らかにされた¹³。強豪国以外の、アジアで開催される初めての RWC である。開催都市については、2015 年 3 月 2 日に、国際ラグビー評議会から、大会運営を委託された「ワールドカップリミテッド(World Cup Limited)」がダブリン（アイルランド）で行われた理事会で決定した。

なお、民間の EY 総合研究所（日本）は 2015 年 9 月 30 日、2019 年 RWC 日本大会開催による直接効果・間接効果等を合わせた経済効果が約 4,200 億円とする試算を公表している¹⁴。



図 1－2 2019 年 RWC 日本大会の公式ロゴ¹⁵

当初、開催 12 都市の中で、東京都にある新国立競技場で開幕戦と決勝戦が行われることが決定されていたが、当会場が使用できなくなったことに伴い、計画変更について調整を行った結果、ラグビーワールドカップリミテッド及びワールドラグビーの承認を受け、2015 年 9 月 28 日、東京都の試合開催会場が東京スタジアムに変更となることが発表された。

また、開会式・開幕戦を東京スタジアムで、決勝戦を横浜国際総合競技場で開催することが同時に発表された。開会式・開幕戦と決勝戦が異なるスタジアムで行われるのは、1995 年の南アフリカ大会（第 3 回）以来となる¹⁶。

2016 年春以降にチームキャンプ地選定プロセスが発表となり、同年後半に組み合わ

¹³ 当協会ロンドン事務所マンスリートピック(2015 年 1 月)

¹⁴ EY 総合研究所 website

¹⁵ World Rugby website より。朝日と富士山がモチーフとされた。

¹⁶ 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会発表（2015 年 9 月）

せ抽選会・試合日程発表となる予定となっている¹⁷。予選プール¹⁸や決勝トーナメントの各試合、強豪国同士の試合など、各試合カテゴリーによって、必要となるスタジアムの収容人数も異なっているため、各スタジアムでどのような試合が組まれるのかが注目されるところである。

既に、20 チームのうち、前回大会(2015 年)の各予選プール上位 3 位であった次の 12 チームがそのまま本大会に出場することが決まっている¹⁹。

ニュージーランド、日本、アルゼンチン、オーストラリア、イングランド、フランス、ジョージア、アイルランド、イタリア、スコットランド、南アフリカ、ウェールズ

本大会は、約 200 万人の観客動員数と約 20 万人の訪日外国人が見込まれている²⁰。

¹⁷ 2015 年 6 月現在 All For Japan Team website より

¹⁸ いわゆる予選として各組に別れて行われるリーグ戦（総当り戦）

¹⁹ Rugby World Cup website

²⁰ 首相官邸 website 2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会関係府省連絡会議（第 3 回）議事録（2015 年 1 月 30 日）

表 1 - 2 2019 年 RWC 日本大会の開催概要²¹

主 催	ワールドラグビー (World Rugby)
開催予定時期	2019 年 9 月 20 日～11 月 2 日 (44 日間)
参加チーム	20 チーム
試合形式	予選プール：40 試合 (5 チーム×4 プール (プール内総当たり戦)) 決勝トーナメント：8 試合 (準々決勝、準決勝、3 位決定戦、決勝) 総計 48 試合
試合開催会場	日本全国 12 会場 (図 1 - 2、表 1 - 3 参照)
大会の特長	アジアで初のワールドカップ ラグビー伝統国以外で初のワールドカップ 7 人制ラグビーが 2016 年オリンピックで男女ともに正式種目として採用されてから最初の大会

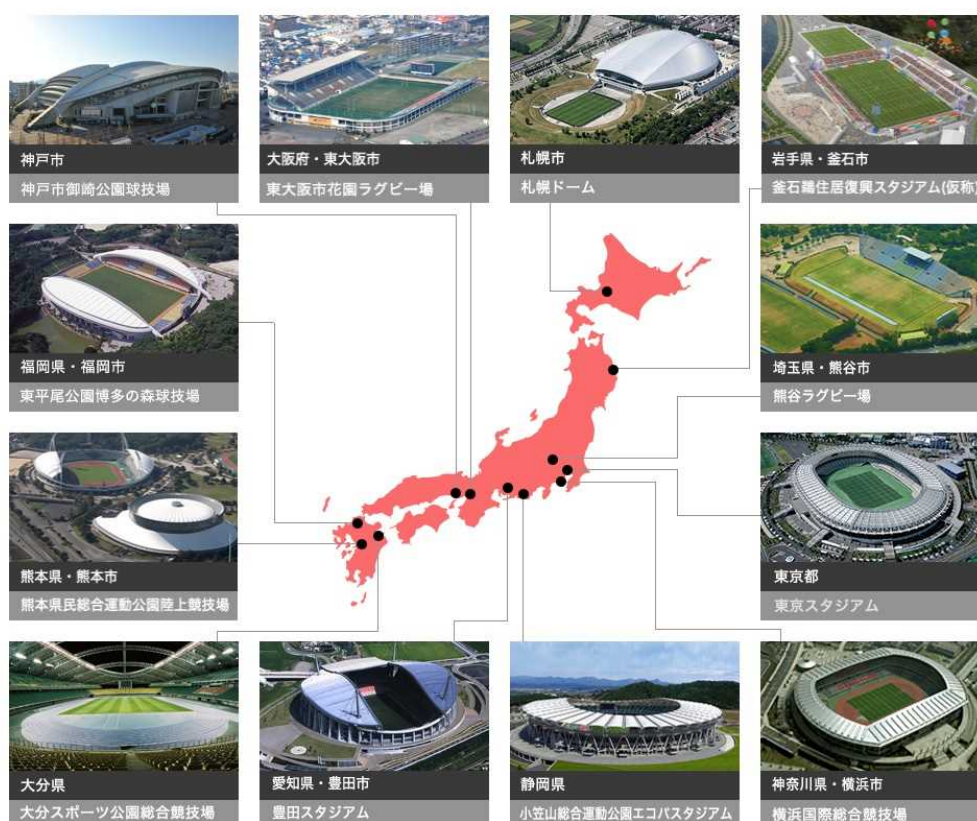


図 1 - 3 2019 年 RWC 日本大会の開催都市・試合開催会場²²

²¹ 2019 All For Japan Team website 及び公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会発表、World Rugby より

²² 2019 All For Japan Team website

表 1－3 2019 年 RWC 日本大会の開催都市・試合開催会場²³

開催都市	試合開催会場	収容人数
札幌市	札幌ドーム	41,410 人
岩手県・釜石市	釜石鵜住居復興スタジアム（仮称）（新設）	16,187 人
埼玉県・熊谷市	熊谷ラグビー場	24,000 人
東京都	東京スタジアム	49,970 人
神奈川県・横浜市	横浜国際総合競技場	72,327 人
静岡県	小笠山総合運動公園エコパスタジアム	50,889 人
愛知県・豊田市	豊田スタジアム	45,000 人
大阪府・東大阪市	東大阪市花園ラグビー場	30,000 人
神戸市	神戸市御崎公園球技場	30,312 人
福岡県・福岡市	東平尾公園博多の森球技場	22,563 人
熊本県・熊本市	熊本県民総合運動公園陸上競技場	32,000 人
大分県	大分スポーツ公園総合競技場	40,000 人
◇開会式・開幕戦：東京スタジアム ◇決勝戦：横浜国際総合競技場		

表 1－4 試合カテゴリーに対する会場収容人数の要件²⁴

試合カテゴリー		収容人数の目安
開幕戦、準決勝、3 位決定戦、決勝		60,000 人以上
準々決勝		35,000 人以上
プ ー ル 戦	カテゴリーA：ティア ²⁵ 1 同士の対戦、開催国（日本）の試合	40,000 人以上
	カテゴリーB：ティア 1 とそれ以外のチームとの対戦	20,000 人以上
	カテゴリーC：ティア 2 以下の対戦	15,000 人以上

²³ 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会発表（2015 年 9 月）。なお、自治体名併記は連名での開催。収容人数は All For Team website、東京スタジアムのみ味の素スタジアム website より。

²⁴ 北九州市資料「ラグビーワールドカップ 2019 について」、J Sports website を参考

²⁵ ティアは「階層」を意味し、最高位である「ティア 1」には北半球の強豪 6 カ国（イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランス、イタリア）と南半球の強豪 4 カ国（オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アルゼンチン）の計 10 カ国が属する。それ以外の国が実績などに応じて「ティア 2」以下に分類される。（参照：岩渕健輔、Number Web（2015 年 3 月））

第3節 1987年第1回RWC（ニュージーランド・オーストラリア大会）の概要

表1－5 1987年第1回RWC大会概要

- 1 大会日程：1987年5月22日～6月20日（30日間）
- 2 参加国数：16国・地域
- 3 観戦者数：60万人（テレビ視聴者：3億人）
- 4 大会結果：

（予選リーグ） ※各組上2段のチームが決勝トーナメントへ進出

A組	B組	C組	D組
オーストラリア	ウェールズ	ニュージーランド	フランス
イングランド	アイルランド	フィジー	スコットランド
アメリカ	カナダ	イタリア	ルーマニア
日本	トンガ	アルゼンチン	ジンバブエ

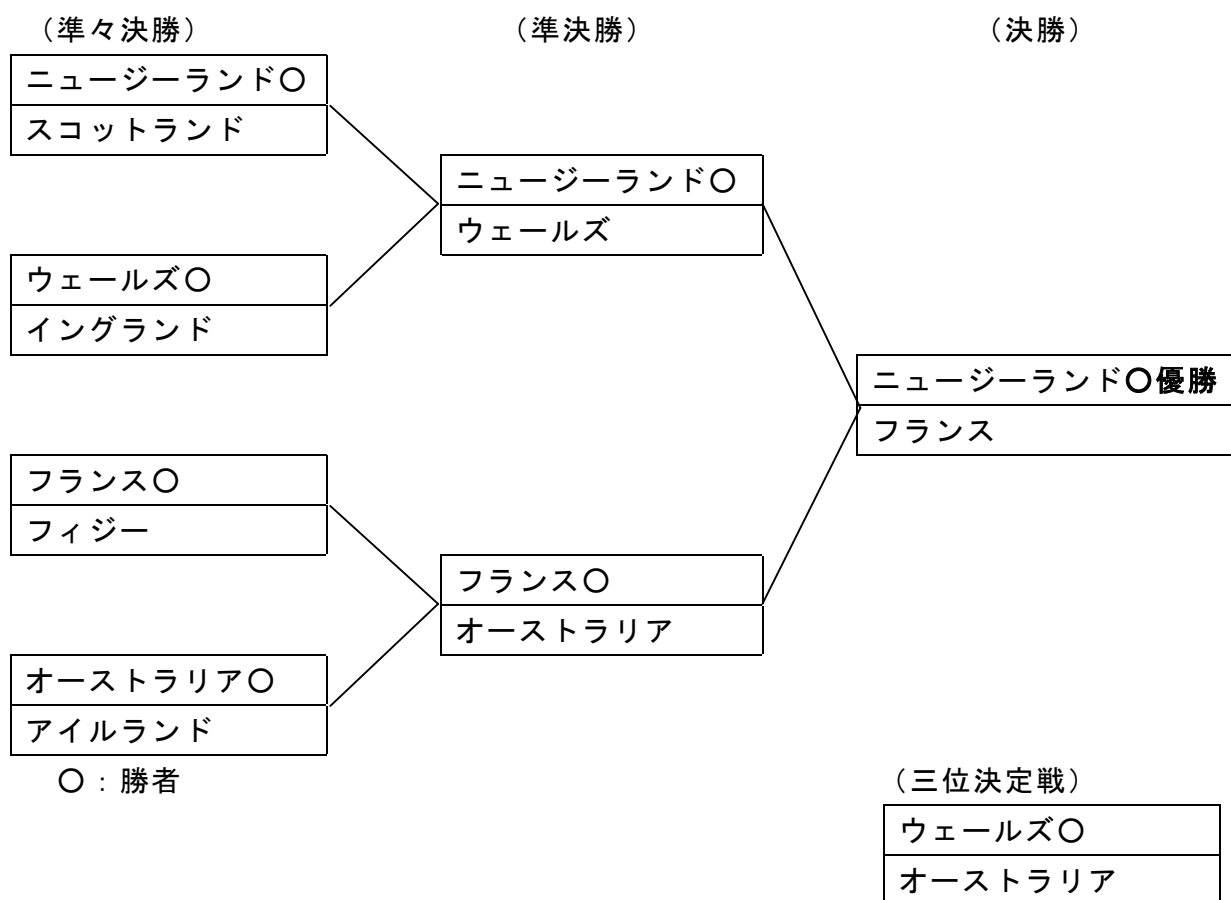
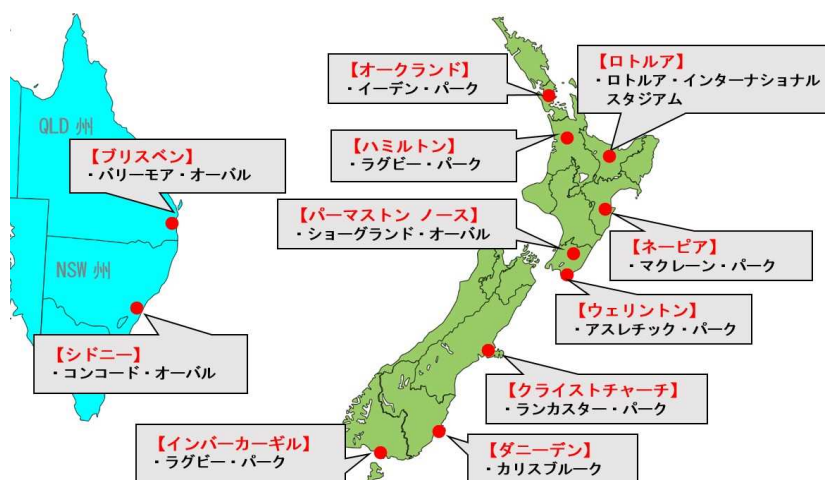


表 1－5 1987 年第 1 回 RWC 大会概要（続き）

5 試合会場：2ヶ国 11 都市 11 会場²⁶

国名	スタジアム名 【所在都市名】	収容人数	使用試合
ニュージーランド (9 都市 9 会場)	イーデン・パーク (Eden Park) 【オークランド】	55,000	予 3、準々 1、 決
	アスレチック・パーク (Athletic Park) 【ウェリントン】	40,000	予 4
	ロトルア・インターナショナル・スタジアム (Rotorua International Stadium) 【ロトルア】	50,000	3 位
	マクレーン・パーク (MacLean Park) 【ネーピア】	26,500	予 1
	ラグビー・パーク (Rugby Park) (現 Waikato Stadium) 【ハミルトン】	32,000	予 1
	ショーグラウンド・オーバル (Showgrounds Oval) (現 Arena Manawatu) 【パーマストン ノース】	20,000	予 1
	ランカスター・パーク (Lancaster Park) 【クライストチャーチ】	50,000	予 3、準々 1
	カリスブルーク (Carisbrook) 【ダニーデン】	45,000	予 3
	ラグビー・パーク (Rugby Park) 【インバカーギル】	23,500	予 1
オーストラリア (2 都市 2 会場)	コンコード・オーバル (Concord Oval) 【シドニー (NSW)】	25,000	予 4、準々 1、 準 1
	バリーモア・オーバル (Ballymore Oval) 【ブリスベン (QLD)】	27,000	予 3、準々 1、 準 1



²⁶ スタジアム名は当時のもの、収容人数は The Official Guide Rugby World Cup(1987 年)、A Guide to the Rugby Union World Cup 1987 (1987 年)による

1 開催前の状況

記念すべき第1回大会は RWC を構想したニュージーランドとオーストラリアの共催で 1987 年に行われた。1985 年の開催決定から開催まで約 2 年しかなく、地域予選を行う時間がない（第2回大会以降は地域予選を実施）ことなどから、国際ラグビー評議会による招待大会として開催された。

招待国は当時の国際ラグビー評議会加盟国であるイングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、フランス、ニュージーランド、オーストラリア（当該加盟国のうち南アフリカは当時アパルトヘイトを行っており、国際的に南アフリカとのスポーツ交流が禁止のため除外）に、世界の地域を代表する 9 カ国を加えた、計 16 チームが選ばれた。

ヨーロッパからイタリア及びルーマニア、南北アメリカからアルゼンチン、カナダ及びアメリカ、太平洋諸島諸国からフィジー及びトンガ、アジアから日本、アフリカからジンバブエが選出された（西サモアは補欠枠）²⁷。そして、この第1回大会が各大陸からチームが集まる初のラグビーの世界一を争うチャンピオンシップとなった²⁸。

大会会場は、オーストラリアが 2 都市 2 会場、ニュージーランドが 9 都市 9 会場となった。オーストラリアでは、NSW 州のシドニー郊外にあるコンコード・オーバル（Concord Oval ; NSW 州ラグビー・ユニオンの拠点となる予定の場所）と QLD 州のブリスベンにあるバリーモア・オーバル（Ballymore Oval）の 2 つのスタジアムが会場となった。当大会のメインスポンサーとなったのは日本の国際電信電話株式会社（KDD）²⁹。当時、スポンサーがまだ決まっていない段階においては、今後のスポンサーの意向を考慮すると RWC スポンサー以外の広告看板がない「クリーン・スタジアム（Clean Stadium）」を整備する必要があった。この広告等の諸事情により、これまで NSW 州の伝統的なラグビーの試合会場であるシドニー・クリケット・グラウンド（Sydney Cricket Ground）は使用できなかった。また、シドニーとブリスベン以外の都市では、ラグビー・ユニオンの人気が弱かったこともあって、オーストラリアではこの 2 会場で行われることとなったようである。

RWC 開催のために会場となるスタジアムの改修等が行われたところも多かった。例えば、コンコード・オーバルでは、既存のスタンドの拡張や増設、グラウンド表面の改修なども行われ、また、バリーモア・オーバル、コンコード・オーバル、ランカス

²⁷ David Green, 1987 Rugby World Cup (New Zealand History website : the History Group of the New Zealand Ministry for Culture and Heritage)には、次のように記されている。

「選定理由については明白であった。イタリア、ルーマニア、アルゼンチンは、メジャーチームに対する最近の試合結果が良かった。カナダ、アメリカ、日本、フィジー、トンガは長いラグビーの歴史があった。そのうちカナダ、アメリカ、日本は、テレビマーケットの収益が期待できた。ジンバブエは南アフリカに代わる最後の一席への配慮が認められた。」

²⁸ なお、かつて 1900 年から 1924 年にかけて、ラグビーがオリンピックの種目として、ごく少数のチームが参加して行われていたことはあった。1924 年大会を制したのはアメリカであったので、つまり今現在のオリンピック王者はアメリカということになる。2016 年オリンピックでは 7 人制ラグビーが男女とも正式種目として決定している。

²⁹ このほか、マツダ、ゼロックス、スタインラガー（ニュージーランドのビール会社）がスポンサーであった。一方、2015 第 8 回大会では、コカ・コーラ、ハイネケン、ランドローバー、東芝など 10 の企業がワールドワイド・パートナー／オフィシャル・スポンサーとなった。

ター・パーク (Lancaster Park : クライストチャーチ)、ロトルア・インターナショナル・スタジアム (Rotorua International Stadium : ロトルア)、イーデン・パーク (Eden Park : オークランド) では、10 のテレビ解説者用ブース、8 のラジオ解説者用ブースを設置する改修工事も行われた³⁰。

2 大会期間中の状況

オーストラリアでは、この RWC の開催時期 (5 月～6 月) が、第 3 章で後述するようにちょうど当時のラグビーのメインストリームである、ラグビー・リーグやオーストラリアン・フットボールのプロの試合が行われる時期であったため、この大会への関心を得るのには苦労していた。

また、ニュージーランドでもオーストラリアよりは関心は高かったものの、それでも大会の序盤は、スタジアムが溢れかえるような状況からは程遠かったという。1987 年の RWC ホスト国であるにも関わらず、前年の 1986 年に非公認のニュージーランドチーム (The Cavaliers ; 実際には公認のナショナルチームのオールブラックス (All blacks) のメンバーで構成) が対外試合を禁止しているアパルトヘイト中の南アフリカに遠征し、試合を行ったことが、自国の多くのラグビーファンを失望させ、それを引きずってチケット販売が落ち込んだことも原因だといわれている。この遠征によって、ニュージーランド政府も外国高官を RWC に招待したり、海外の選手や関係者のための式典を行うことをためらっていたようである。当時のニュージーランド首相デービッド・ロンギ (David Lange) もいくつかの試合観戦をボイコットした (ただし、代わりに出席した大臣は VIP 席で喜んで観戦していたそうである)。

しかしながら、大会が進むにつれて観客数は改善し、ニュージーランドの最後のプール戦であるウェリントンでのアルゼンチン戦では、チケットが売り切れる 35,000 人を超える観客が集まった。その熱気はそのまま最終日まで続き、オークランドのホテルも各国のラグビーファンで埋まり、カフェもバーもホテルも街全体が RWC で一色となった。決勝戦は世界的な注目を浴び、それ以降の RWC に対する商業ベースでの関心も右肩上がりのものとなった。ただし、元オーストラリア監督のボブ・ドワイヤー (Bob Dwyer) 氏が当時を振り返り、現在の大会規模と比べると、1987 年大会は村の市場の賑わいみたいなものだった、とも述べている³¹。当時を知るオークランドのイーデン・パークの担当者に話を伺っても、後述の大会のようなファンゾーンやスタジアム外への大型スクリーンの設置など、大会を盛り上げる華やかな仕掛け、公共交通機関の整備も記憶になく、すべてが 2011 年大会との比較の対象にならないと語っていた。

一方で、この輝かしい大会によって、それまでラグビーが抱えていた様々な問題を露呈させてしまった。選手の日当は上昇し、またオールブラックスのキャプテンはテレビコマーシャルに出たりもした。アマチュア主義を遵守し、選手にラグビー関係で

³⁰ Rugby World Cup 1987, ABC (1987 年) 及び Official Souvenior Programme, KDD (1987 年)

³¹ A Complete History of the Rugby World Cup (2015)

お金を受け取らないように先導しているはずの国際ラグビー評議会自身がスポンサーからの多額の出資を許容し、建前と矛盾しているような状態になっていた。こういったことも含め、ラグビーのプロ化や商業的観点での RWC など、今後議論となっていく一つのきっかけともなった。

第4節 2003年第5回RWC（オーストラリア大会）の概要

表1－6 2003年第5回RWC大会概要

- 1 大会日程：2003年10月10日～11月22日（44日）
- 2 参加国数：20国・地域
- 3 観戦者数：180万人（テレビ視聴者：34億人）
- 4 大会結果：

（予選リーグ）※各組上2段のチームが決勝トーナメントへ進出

A組	B組	C組	D組
オーストラリア	フランス	イングランド	ニュージーランド
アイルランド	スコットランド	南アフリカ	ウェールズ
アルゼンチン	フィジー	サモア	イタリア
ルーマニア	アメリカ	ウルグアイ	カナダ
ナミビア	日本	ジョージア	トンガ

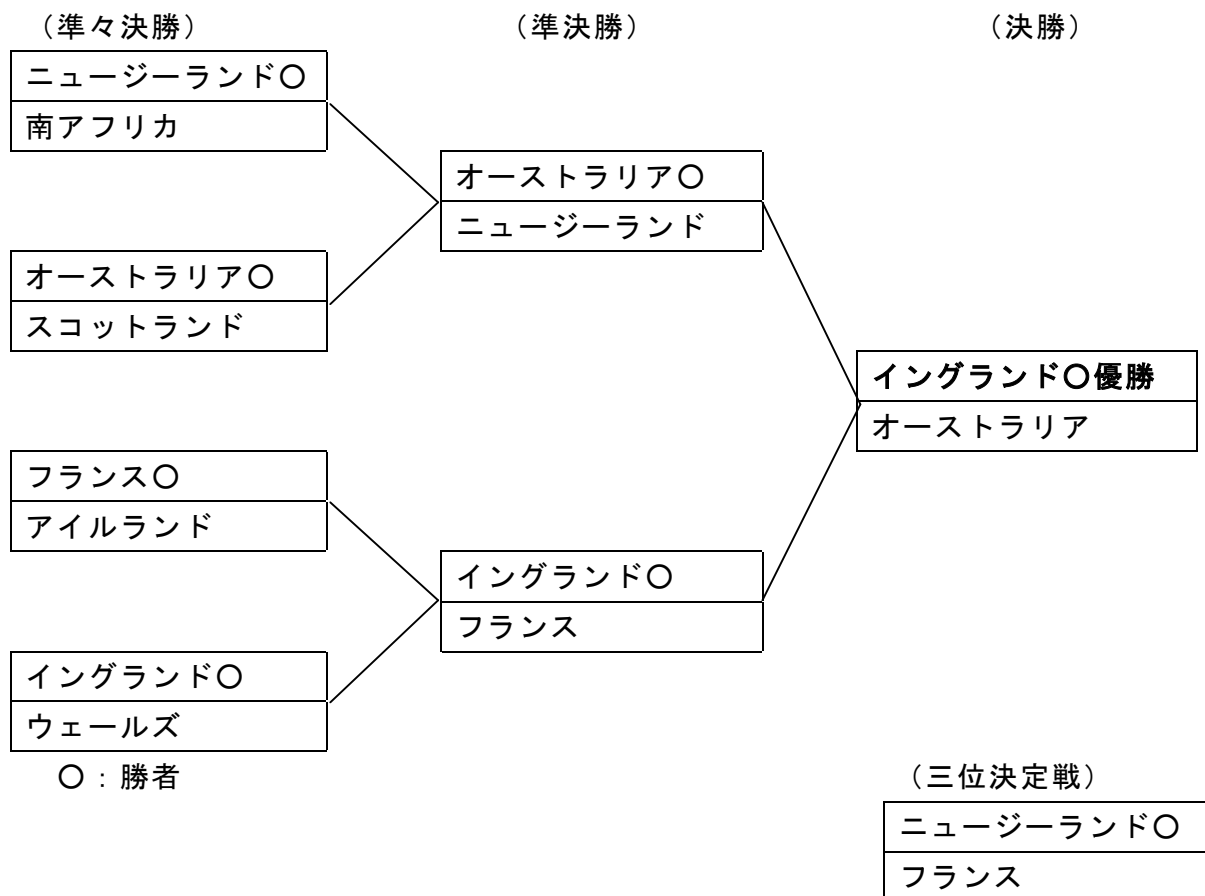
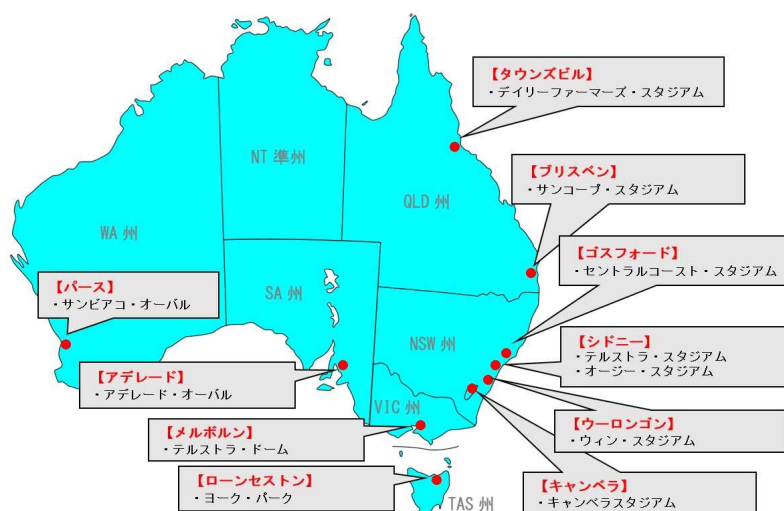


表 1－6 2003 年第 5 回 RWC 大会概要（続き）

5 試合会場：11 都市 12 会場

スタジアム名(当時) 【所在都市名/州】	収容人数 ³²	使用試合
テルストラ・スタジアム (Telstra Stadium) (現 ANZ Stadium) 【シドニー/NSW】	80,000	予 3、準 2、3 位、 決
オージー・スタジアム (Aussie Stadium) (現 Allianz Stadium) 【シドニー/NSW】	42,500	予 5
セントラルコースト・スタジアム (Central Coast Stadium) 【ゴスフォード/NSW】	20,000	予 3
ウィン・スタジアム (WIN Stadium) 【ウーロンゴン/NSW】	20,000	予 2
テルストラ・ドーム (Telstra Dome) (現 Etihad Stadium) 【メルボルン/VIC】	52,000	予 5、準々 2
サンコープ・スタジアム (Suncorp Stadium) 【ブリスベン/QLD】	52,500	予 7、準々 2
デイリーファーマーズ・スタジアム (Dairy Farmers Stadium) (現 1300SMILES Stadium) 【タウンズビル/QLD】	30,000	予 3
アデレード・オーバル (Adelaide Oval) 【アデレード/SA】	25,000	予 2
サンビアコ・オーバル (Subiaco Oval) (現 Patersons Stadium) 【パース/WA】	43,000	予 5
ヨーク・パーク (York Park) (現 Aurora stadium) 【ローンセストン/TAS】	20,000	予 1
キャンベラ・スタジアム (Canberra Stadium) 【キャンベラ/ACT】	25,000	予 4



³² Rugby World Cup 2003 The ULTIMATE GUIDE (RUGBY REVIEW, 2003 年)

1 開催前の状況

本大会は 2003 年 10 月から 11 月にかけて開催され、2000 年シドニーオリンピック・パラリンピック大会³³以降で、オーストラリアで最大の国際スポーツイベントとなった。

RWC 本戦出場枠 20 チーム中、8 チーム（オーストラリア、フランス、南アフリカ、ニュージーランド、アルゼンチン、スコットランド、イングランド、ウェールズ）は前回 1999 年大会の準々決勝進出チームが自動的に出場が決定し、残りの 12 枠を争い、81 カ国が参加して地区大会が行われた。

1987 年第 1 回大会以降、2003 年までの間、ラグビーを取り巻く環境で大きな転機として、1995 年に国際ラグビー評議会によってラグビー・ユニオンのアマチュア主義が撤回されていたことが挙げられる。それに伴って大会の商業化が一層進んでいた。この大会も開催に当たっては、これまで同様、スタジアムでのスポンサー以外の広告の排除を要求された。RWC の開催に当たっては、このビジネスの観点は実は思っている以上に大きな部分である。オーストラリアのラグビー・ユニオンを統括する組織であるオーストラリアラグビーユニオン（以下、ARU）も 2003 年年次報告の中でも、「第 5 回大会はホスト国として、これまでの大会と比較してもかなり大変だったようだ。特筆できるのは、商業的にクリーンな場所を要求されていたこと」と記している³⁴。スタジアム内に常設されているコーポレートボックス³⁵についても、4 年前の 1999 年ウェールズ大会では RWC スポンサー以外が通常抱えているコーポレートボックスの 50%は RWC 側が利用できるようにしていたが、今大会については 100%利用できることが必要とされた。結局、ARU は国際ラグビー評議会が要求するクリーンなグラウンド及びコーポレートボックスを達成するために、既存のスポンサーに計 4 千万ドルを支払ったとされている³⁶。また、当初、2003 年大会もオーストラリアとニュージーランドの共催で行われ、オーストラリアがメイン・ホスト、ニュージーランドがサブ・ホストとなる予定だったが、ニュージーランド内のスタジアムが求められている「クリーン・スタジアム」の水準を達成されない見込み等から、開催の前年になって当大会がオーストラリア単独で開催されることが国際ラグビー評議会から発表された。

2 大会期間中の状況

開催は、NT 準州を除く 7 つの州・地域、11 都市 12 会場となり、決勝の会場はシドニーオリンピックのためにオリンピック公園内に整備されたメインスタジアムであるテルストラ・スタジアム（Telstra Stadium）となった。オリンピック終了後には、2001 年から 2003 年にかけて、陸上競技トラックが取り外され陸上競技場に移され、また、下部の座席が取り外されて可動式となり、楕円形オーバル競技場となったほか、その後の利用に適した規模として 83,500 人収容のスタジアムとするために南北のウイング

³³ 以降「シドニーオリンピック」と簡略表記する。また、オリンピック・パラリンピック大会は特に断りが無い限り「オリンピック」と表記する。

³⁴ Australian Rugby Union Annual Report 2003

³⁵ 食事等の提供も可能な団体用個室観覧席

³⁶ NZ Herald（2003 年 2 月）

席が取り外され、屋根が設置された³⁷。このスタジアムの名称は、オリンピック当時はオリンピックスタジアム、オリンピック開催期間前後はスタジアム・オーストラリア（Stadium Australia）とされていた、ネーミングライツによって 2002 年からテルストラ・スタジアム（RWC 当時も）、2008 年 1 月から現在まで ANZ スタジアムとなっている³⁸。



図 1－4 ANZ スタジアムの改修前後（左が改修前）³⁹

試合開催都市では、スタジアム近くに設置した大型スクリーンでの試合観戦、無料コンサートやオフィシャル・スポンサーによる音楽イベント等のほか、開催地の文化等を紹介する催事も数多く開催された。シドニー会場の一つ、テルストラ・スタジアムがあるオリンピック公園内も、大型スクリーンが設置されたほか、食べ物、飲み物の屋台やオフィシャルグッズ販売の屋台等が出店された。チケットがなくスタジアム内で観戦できない人でも大型スクリーンを通して RWC の熱気を感じ盛り上がりをも十分に味わえる会場となっていた。また、シドニー市内では試合会場から離れた観光名所オペラハウス前やロックス地区等の各所でもスクリーンが設置され、自国のレプリカジャージを着た国内外の多くのファンが集った。

当時のワールドカップの様子を知るラグビーファンに話を聞くと、シドニー市内からオリンピック公園までは、オリンピック公園駅まで行く電車のほか、様々なエリアから直行バスが臨時運行されるなどアクセスが大変便利だったとのことであった。一方、シドニー市内のパブでも店内の大型テレビで試合観戦を呼びかける看板を掲げたり、試合開始から最初の得点までの間、ビールを安く提供するというプロモーションを行っていた店もあったそうである。

³⁷ 当協会クレアレポート「シドニーオリンピックの歴史とレガシー」（2015 年）

³⁸ テルストラは大手通信会社であり、2003 年大会時はオフィシャル・パートナー（現 ANZ は大手銀行）。2003 年大会のブリスベンの Suncorp も大手銀行であり、オフィシャル・パートナー。しかしながら、タウンズビルの Dairy Farmers も乳飲料会社であり、オフィシャル・パートナーではないにもかかわらず、スタジアム名で使われていることに関して、言及した文献を見つけることはできなかった。

³⁹ [写真] SKYSCRAPER CITY.COM Website 及び Austadiums Website

大会会場の都市における RWC 関連イベントについて、唯一の西海岸地区の開催地である WA 州パースでも次のような取組が行われた。

表 1－7 パースで RWC 時期に開催されたイベント⁴⁰

場所	主な行事
市内中心部	・ RWC 関連情報をワンストップで提供する施設の設置（マレー・ストリートモール）（10 月 8 ～ 19 日） ・ ラグビーチームに対する公式歓迎昼食会（10 月 10 日） ・ ノースブリッジ地区のパブ（酒場）での RWC 体験イベント（パブ・フェスト（Pub-fest））（RWC 期間中）
スピアコ地区	・ コカ・コーラ・スピアコ・ミュージックフェスティバル ・ 無料のサンデーコンサート（スピアコシアターセンター） ・ その他娯楽催事（リーガルシアター）
ジュンダラップ地区	・ 大型スクリーンと Live site の設置（シドニーでの開会式や強豪同士のビックマッチを生放送）（アリーナ・ジュンダラップ） ・ バーチャルコンサート
フリーマントル地区	・ テイスト・オブ・ネーション・フェスティバル（WA の文化、食、ワインを楽しむイベント。野外マーケットも同時開催）（10 月 19 日）

オーストラリア人のラグビーへの関心（Awareness of Rugby）についての調査によると、大会前の 2002 年では 25% だったが、大会期間中は 85% まで上昇した⁴¹。予選 1 試合（ルーマニア vs ナミビア）だけの会場となった、本土から離れた島の州である TAS 州のローンセストンでも、地元新聞の The EXAMINER は次のように当時の様子を伝えている⁴²。

- ・ ラグビーの国際試合という、現実離れしたような試合がここで開催される機会はこれまで無かった。
- ・ 両チームは、地元の蜂蜜、ラベンダー、チョコレート、そしてボークス・ビール（地ビール）を沢山受け取り、王族のような扱いを受けていた。

⁴⁰ 2003 年 8 月 26 日 WA 州政府発表

⁴¹ Australian Rugby Union Annual Report 2003

⁴² 2003 年 11 月 4 日の記事

- ルーマニアチームは一週間ずっと滞在し、釣りをしたり、ボートに乗ったりして過ごしていた。ナミビアチームは試合の2日前に来たばかりだったが、存在感があった。
- タスマニアはラグビー（ユニオン）の盛んな州ではない⁴³、それもオーストラリアチームに大差で負けた弱いチーム同士の試合にもかかわらず、15,000 人を超える人々が観戦し、その試合に大いに熱狂した。（37-7 でルーマニアチームの勝利）

なお、TAS 州政府の調査では、RWC によって TAS 州には 1,838 人の訪問者（国外：722、州外：1,116 人）に加え、選手・関係者 150～200 人程度の訪問があったとしている。スタジアムの収容人数を考えると、多くの地元の方が観戦したと思われる。



図 1-5 大会会場となったローンセストンの Aurora Stadium（旧 York Park）⁴⁴

⁴³ AFL（第3章参考）の試合が開催されることもあり、オーストラリアン・フットボールの人気の高い。

⁴⁴ [写真] 筆者撮影(2016年2月)

第5節 2011年第7回RWC（ニュージーランド大会）の概要

表1－8 2011年第7回RWC大会概要

- 1 大会日程：2011年9月9日～10月23日（45日）
- 2 参加国数：20国・地域
- 3 観戦客数：148万人（テレビ視聴者：39億人）
- 4 大会結果：

（予選リーグ）※各組上2段のチームが決勝トーナメントへ進出

A組	B組	C組	D組
ニュージーランド	イングランド	アイルランド	南アフリカ
フランス	アルゼンチン	オーストラリア	ウェールズ
トンガ	スコットランド	イタリア	サモア
カナダ	ジョージア	アメリカ	フィジー
日本	ルーマニア	ロシア	ナミビア

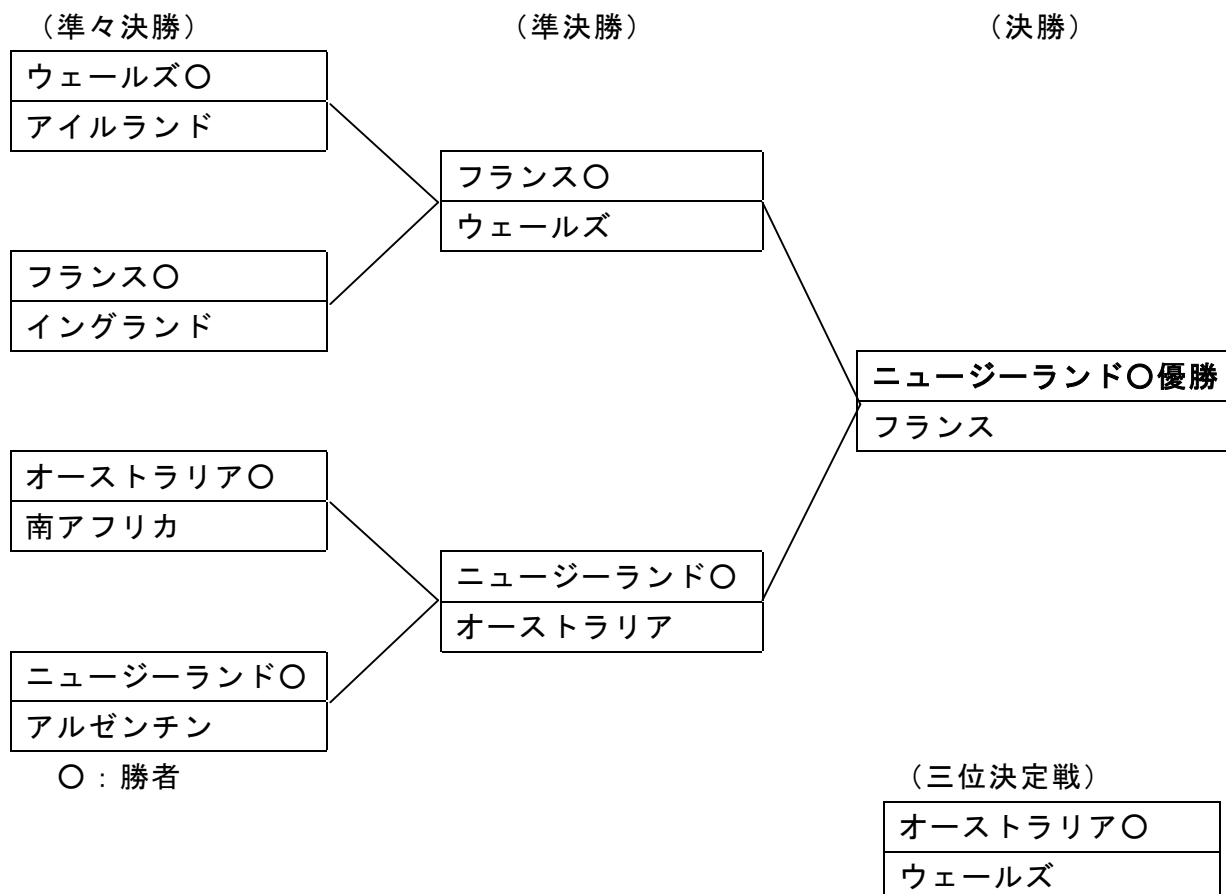
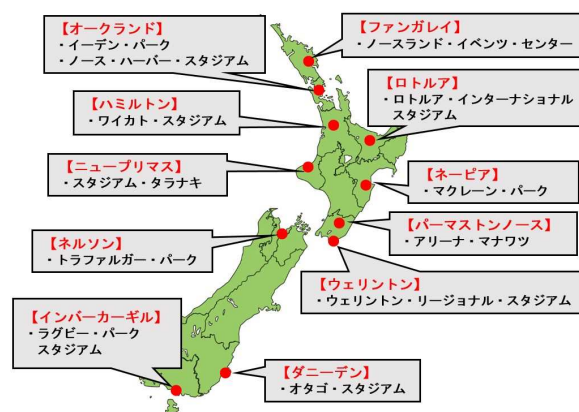


表 1－8 2011 年第 7 回 RWC 大会概要（続き）

5 試合会場：11 都市 12 会場

スタジアム名 （所在都市名）	収容人数 ⁴⁵	使用試合
イーデン・パーク (Eden Park) 【オークランド】	60,000	予 5、準々 2、準 2、3 位、決
ノース・ハーバー・スタジアム (North Harbour Stadium) 【オークランド】	30,000	予 4
ウェリントン・リージョナル・スタジアム (Wellington Regional Stadium) 【ウェリントン】	40,000	予 6、準々 2
ロトルア・インターナショナル・スタジアム (Rotorua International Stadium) 【ロトルア】	26,000	予 3
マクレーン・パーク (MacLean Park) 【ネーピア】	15,000	予 2
ワイカト・スタジアム (Waikato Stadium) 【ハミルトン】	30,000	予 3
スタジアム・タラナキ (Stadium Taranaki) 【ニュープリマウス】	26,000	予 3
ノースランド・イベント・センター (Northland Events Centre) 【ファンガレイ】	20,000	予 2
アリーナ・マナワツ (Arena Manawatu) 【パーマストン ノース】	15,000	予 2
トラファルガー・パーク (Trafalgar Park) 【ネルソン】	18,000	予 3
オタゴ・スタジアム (Otago Stadium) 【ダニーデン】	30,000	予 4
ラグビー・パーク・スタジアム (Rugby Park Stadium) 【インバカーギル】	17,000	予 3

⁴⁵ Spirco Zavos, How to watch the Rugby World Cup 2011 (2011 年)

1 開催前の状況

2011 年 RWC はニュージーランドの歴史上最も大きなスポーツイベントとなった。11 都市 12 会場で行われることになったが、それに向けて、人口に近い数字を掲げ、国民全てが国全体で大会を大いに盛り上げるという「400 万人のスタジアム (stadium of four million)」というコンセプトで準備が進められた。ニュージーランドの伝統文化の披露をはじめ、食、パフォーマンス、アクティビティ、そしてビジネスをつなぐプログラムなど様々な催し物が行われ、ニュージーランド人の多くがこの大会に関わり、国全体でこの大会期間を盛り上げた。

クライストチャーチは、当初大会開催地となっていた。しかし RWC 直前の 2011 年 2 月 22 日に発生したカンタベリー地震によって、クライストチャーチ大聖堂が崩壊するなど、市内の多くの地域で甚大な家屋被害や多数の死傷者が発生した。7 つの試合（予選 5、準々決勝 2）が行われるスタジアム・クライストチャーチ (Stadium Christchurch) にも被害が発生し、予定されていた試合は分散して、他の開催都市へと移されることとなった。

(1) イーデン・パーク等の状況

決勝等が行われる、イーデン・パークは 1987 年第 1 回大会の会場でもあり、24 年の歳月を経て再び使用されることになったが、2011 年大会を迎えるにあたってイーデン・パークの百年の歴史の中で最も大きな改修がされ、2010 年に完成した。2 億 8 千万ドルの費用はイーデン・パーク・トラスト (Eden Park Trust)、オークランド広域自治体 (Auckland Regional Council) 等のほか、ニュージーランド政府も 1 億 9 千万ドルを負担した。

サウス・スタンドは 2 万 2 千席 (コーポレートボックスが 50) レベルへと建て替え、通常の収容人数をトータル 5 万席まで拡大。さらに 1 万席の仮設スタンドを設置し計 6 万席のスタジアムを整備した (スタジアムの内側にある VIP 用の仮設席等を含めると 6 万 1 千席⁴⁶⁾)。照明設備、自動改札ゲートなども改修⁴⁷⁾。スタジアム内には、広いコンコース (通路)、2 つの VIP ラウンジ、最新機器による放送センター等の整備も行われた。なお、仮設スタンドは、RWC 期間だけのリースであり、RWC 終了後、次のリース先である 2012 年ロンドンオリンピックのために取り外され、輸送された。

また、イーデン・パークでの公共機関でのアクセスを改善するため、イーデン・パーク内のバスターミナルが整備されたほか、オークランド市役所が中心となり最寄り駅の Kingsland 駅と Morningside 駅の改修、駅とスタジアムに向かう歩道の整備も行われた。

なお、オークランド全体としては、オークランド空港の国際・国内両ターミナルの改修がなされた他、空港、市内中心部、スタジアムを結ぶ主要道路の改修も行われている。

⁴⁶⁾ イーデン・パーク担当者による

⁴⁷⁾ Rugby World Cup website 等

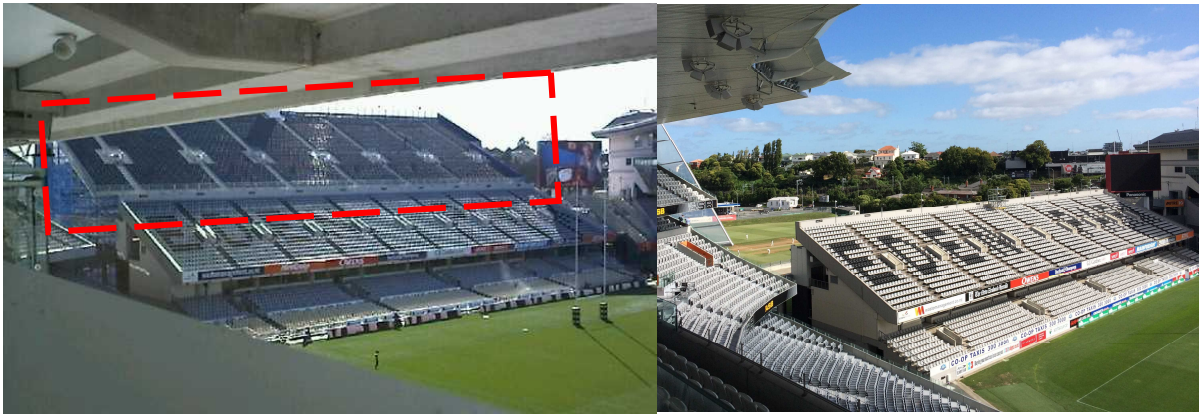


図 1－6 当時の仮設スタンドの一部（左枠内）と現在の様子⁴⁸



図 1－7 スタジアムの外観（左）と当時の仮設スタンドの外側⁴⁹

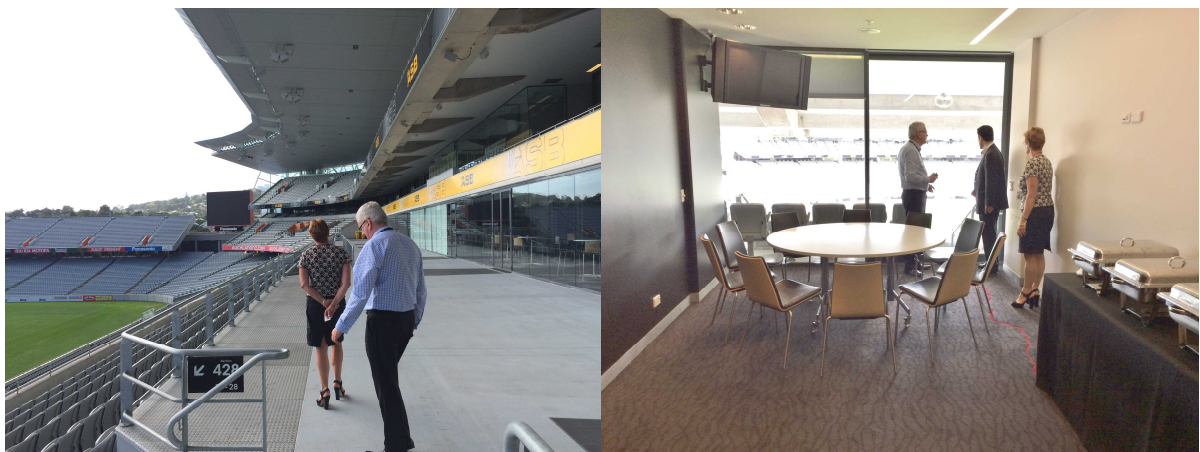


図 1－8 VIP ルーム前と（左）とコーポレートボックス内部⁵⁰

⁴⁸ [写真]（左）矢野武公式ブログ（2011 年 8 月）、（右）筆者撮影（2016 年 3 月）

⁴⁹ [写真]（左）筆者撮影（2016 年 3 月）、（右）イーデン・パーク提供

⁵⁰ [写真] 筆者撮影（2016 年 3 月）。コーポレートボックスには専用の観客席も完備され、外でも観戦できる。

(2) 担当者へのヒアリング（イーデン・パーク）

当時の様子についてイーデン・パークの話を伺う機会を得た（2016年3月）。

（Steve Donaghy 氏（GM Operations & Infrastructure）
Lian Tetley 氏（Membership Manager））

- RWC を迎えるにあたって、2003 年大会会場の一つであるシドニーの ANZ スタジアム（2003 年当時はテルストラ・スタジアム）の担当者に様々な部分を教えてもらい大変有難かった。
- イーデン・パークは行政の所有ではなく、独立したトラスト（Trust）であり受益者（Beneficiary）はオークランド・クリケットとオークランド・ラグビー（という組織）。行政から離れて独自の活動を行っている。
- スポンサー以外の広告がない「クリーン・スタジアム」は最も重要かつ難しい課題であった。広告の規格も決められており、一切の例外が認められない。スタジアム内の大型スクリーンの下に表示されている「パナソニック」というブランド名も隠した。
- スタジアムに関しては、コンコースの幅を広くとった設計とし、スムーズな人の流れを作っている。出口の数も多いので、現在の収容人数では試合終了後スタジアム内の全ての観客を概ね 10 分から 15 分で外へと誘導できる。
- スタジアム内にも多くのボランティアが配置され大変よく機能した。スタジアム内は席、売店、トイレの案内など様々な標識が設置されているものの、ボランティアの対応により瞬時に迷わず案内できる。スタジアム内のスムーズな人の流れを作るためにもオペレーション上とても重要であった。
- VVIP（国賓、国際ラグビー評議会の幹部等）対応は非常に重要。一般観戦者とは入口等の動線も異なるように設計されている。
- 開会式の日以外は、電車とバスのダブルの公共交通機関は非常に効果的に働いた（開会式当日に電車輸送トラブルが発生し、間に合わない観客も出たようだ）。RWC のために構築した敷地内のバスターミナル、駅周辺の整備は、その後のイベント運営をスムーズにさせている。特にバスは、（海を挟んだノースショア地域など）電車が通っていない地域からの観客のスムーズな輸送を担った。
- 多くの観客が自家用車やレンタカーでオークランドに来たが、公共交通機関をきちんと整備することで、オークランド中心部のホテルや駐車場に車を置いて、スタジアムに来ることができたので、近隣の道路のパニックを抑えることができたと考える。
- RWC 観戦チケットを持っている人は、無料で往復の公共交通機関を利用できた。RWC 終了後も、大きなスポーツイベント等については、同様の対応としている⁵¹。

⁵¹ 2003 年大会時に公共交通機関が無料だったという記述は見つけられなかったが、現在、NSW 州内の大きなイベント（例えばシドニーマラソン参加やラグビーマッチ観戦など）でも費用に電車・バス等

- RWC の一切の商業的な部分をコントロールしている国際ラグビー評議会は、巨額の放送権が絡むので、ヨーロッパ諸国と時差があってもきちんと視聴率が稼げるかを気にしていた。スタジアムでの観客数は限られているが、放送権やスポンサーシップはものすごく大きなビジネス。
- テレビ放送局と国際ラグビー評議会によって、スパイダーカム（上空に張ったケーブルによってグラウンド上を縦横無尽に動き、選手の様子なども間近で写せる撮影機材）も設置されたが、選手の表情のほか、絶妙なタイミングで広告もアップで写したりできて、大変重宝されていた。

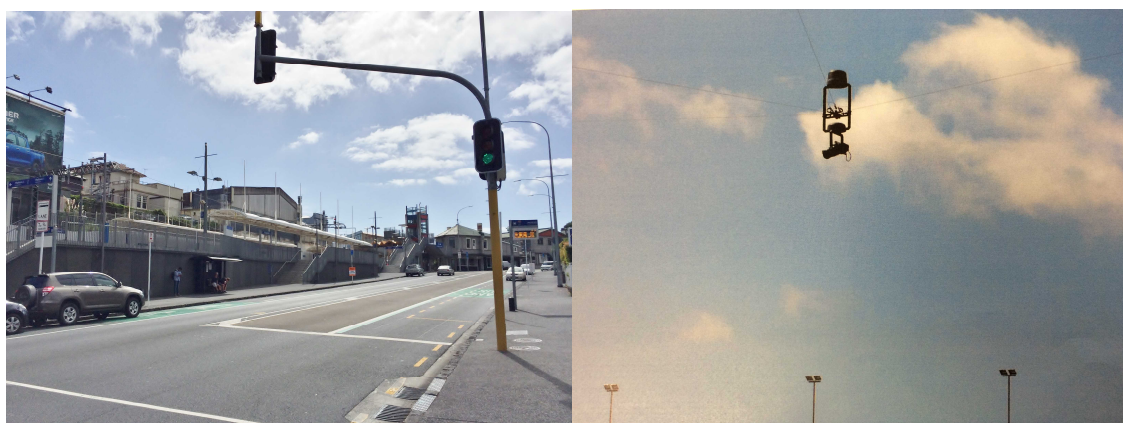


図 1－9 最寄りの Kingsland 駅（左）とスパイダーカム⁵²

- イーデン・パーク内にはファンゾーン（Fan-zones）は無く、スタジアムの外で集まって観戦することは無いが、ファントレイル（Fan trail）というものが行われた。オークランド中心部のウォーターフロントからイーデン・パークまでの数キロの道路沿いでは小さな催し物やイベントが行われており、何万という人々が各国の衣装や仮装をしながらその道路のウォーキングをしていた（特に観戦チケットを持たずそのまま戻る人も多いが、皆楽しんでいた様子）⁵³。

2 大会期間中の状況

この大会のための数多くの訪問客に、ニュージーランドの経験を一生忘れられない経験として印象付けるため、いくつかのプログラムとキャンペーンが取り組まれた。

（1）ファンゾーン（Fan-zones）

観客が集まって試合観戦や各種イベントに参加できる特別会場であるファンゾーンが、ニュージーランドの各都市に設置された。

の往復運賃が含まれることが多く（Integrated ticketing）、ゼッケンやチケットを見せることで利用できる。

⁵² [写真]駅は筆者撮影、スパイダーカムはイーデン・パーク提供

⁵³ オークランド市役所の発表によると、合計 12 万人以上がファントレイルを行っていた。



図 1-10 Hamilton のファンゾーン⁵⁴

ニュージーランド最大の都市で、多くの試合が開催されたイーデン・パークを抱えるオークランド市内には、6つのファンゾーンが設置された。

そのうちの一つ、クイーンズ・ワーフ（Queens Wharf）はオークランド広域自治体とニュージーランド政府が共同で取得し、このウォーターフロントエリアの開発がなされたが、一度に1万人を収容できる国内最大のファンゾーンが設置され、期間中100万人を超える来訪があった。屋内外に大型スクリーンが設置され試合のライブ放送はもちろん、無料コンサートやビジネスイベントなども開催された。屋内施設である The Cloud では、試合がない際にも、展示場、ニュージーランドのビジネスイベントの会場として使用された。ビジネスラウンジでは、大会期間中計300組を超える予約があり、8,000人以上の利用があった。



図 1-11 当時のクイーンズ・ワーフの様子⁵⁵

⁵⁴ [写真] <http://thereandbackagain.me/2011/10/all-blacks-win-the-rugby-world-cup/>



図 1-12 The Cloud (奥)⁵⁶

(2) REAL New Zealand Festival

単にラグビー大会のためだけではなく、RWC 期間、「REAL New Zealand Festival」(以下、REAL NZ Fes)としてニュージーランドの様々な面を紹介するイベントを行った (NZ 2011 Office⁵⁷によって管理)。このイベントは、ニュージーランドで RWC のために行われたものであるが、ニュージーランド国中で一斉に行う初めてのイベントでもあった。全国各地 (大会会場都市はもちろん大会会場となっていない地域でも) において、アート、音楽、食とワイン、ヘリテージ、ビジネスなど 1,236 もの様々なプログラムが行われた。これが「400 万人のスタジアム」を成功させる原動力の一つとなった。こういったプログラムは、宝くじ補助金 (950 万 NZ ドル)、文化遺産省 (Ministry of Culture and Heritage) の文化外交国際プログラム (Cultural Diplomacy International Programme)、地域の団体や私企業からの出資 (合計 4,000 万 NZ ドル以上) によって行われた。

(一例)

- REAL NZ Fes の期間中、100 万人を超える訪問者がオークランドのクイーンズ・ワーフを訪れ、クイーンズ・ワーフ前に設置されたプロモーション施設であるジャイアントラグビーボール内⁵⁸では 490 のショーが 95,709 人参加して行われた。
- クイーンズ・ワーフで 99 のバンドが演奏をするなど、ニュージーランド中で 40 のコンサートが行われた。

⁵⁵ [写真] RNZ2011

⁵⁶ [写真] Jasmaz website

⁵⁷ ニュージーランド政府が設置した RWC 開催時の政策実現のための実行委員会。主に REAL NZ とビジネスマッチングプログラムを実施した。

⁵⁸ 大きさは、縦 25m、横 17m、高さ 12m で、内部に最大 220 人を収容可能。

- 85,000 人以上がクイーンズ・ワーフやウェリントンのウォーターフロントにて、ニュージーランドのクラシック映画やテレビ番組を鑑賞した。
- ウェリントンでは、11,000 人以上が、オールブラックスが国際試合前に踊ること
で有名な伝統的な踊りである、ハカ（Haka）のエキシビションを観覧した。
- ダニーデン近郊のポートチャーメーズ（Port Chalmers）で開催された初めての
シーフードフェスティバルでは、予想を 3 割も上回る 6,500 人が集まった。この
イベントはその後毎年行われている。こういった成功したイベントが、その後
も定例的なイベントとして定着したことは RWC 後の効果として挙げられている。
- 試合会場とはならなかったクライストチャーチであるが、RWC 運営側の協力で、
市内のハグレイ・パーク（Hagley Park）にファンゾーンを設置し、併せてクラ
イストチャーチ・アートフェスティバル等の REAL NZ Fes を行える場所に仕立
て上げたことによって、ラグビーと地域の文化芸術の両方を提供することができ
るようになった。

（３）ボランティア

各種イベントの担い手を広げるため、必要となる 840 万 NZ ドルのうち、600 万 NZ ドルを政府が費やし、大会始まる前の 18 ヶ月前からボランティアの招集業務をスタートさせた。約 18,000 人のボランティア申込者から 8,000 人を面接し、5,564 人をボランティアとして採用した。採用されたボランティアに対し、公式ボランティアプログラムを通じてトレーニングが行われた。ボランティアは、大地震があり大会開催地ではなくなったクライストチャーチを含め、ニュージーランド各地に配置された。全体では、51,000 以上の勤務シフトが与えられ、357,000 時間以上の電話対応も行った。ボランティアの対応業務は様々で、スタジアムでの大会運営や交通機関での対応、メディアの補助なども行った。

国外訪問者からの評価として、10 点中 8.9 点と高い評価があった。

このボランティアによって、この大会の顧客への満足度の向上のほか、人々のボランティアとしての経験、そして将来にわたってボランティアに携わりたいという国民の関心を増加させたことも成果の一つとなった。

（４）ビジネスミーティング

多くのビジネスパーソンが訪問する RWC は自国の産業をプロモーションする絶好の機会であった。ニュージーランド政府は NZ 2011 Office や New Zealand Trade and Enterprise（以下、NZTE）を通じて様々な機会提供をサポートした。

16 分野⁵⁹のニュージーランドの産業を披露する機会を、250 ものイベントを通じて提供し、このイベントのために、NZ 2011 Office は 200 万 NZ ドル、NZTE は 420 万 NZ ドルを拠出した。各産業のイベントは、大会期間中、オークランドに限らず、地方都市でも行われた。ニュージーランド側の出展したほとんどの分野からは、有益な結果が生み出されたとのフィードバックがあったとされている。

(一例)

- 林業博覧会 (場所：ロトルア)
- オークランド国際ボートショー (場所：オークランド)
- The Square Kilometre Array Research and Industry Forum (ICT 関係、場所：ウェリントン)

そのほか、ニュージーランドと海外のビジネスをつなぐため、NZ2011Office によってオンライン上での基盤システム、New Zealand 2011 Business Club (以下、NZ2011Biz) が提供された。これは、プロモーションイベントやネットワーキングの場への招待状を送る機能も具備している。10,018 人が NZ2011Biz に加入し、4,478 人の申込が他国からあった。これを通じて計 552 のイベントが開催され、2 万の新しいビジネスのつながりができたとされている。大会前に行われた調査では、ニュージーランド滞在中でのビジネス活動について、たった 3 % しか関心を示さなかったところが、大会後の調査では、30% の人がビジネスでニュージーランドに戻ってきたいとの反応だったという。

(5) その他

そのほか、RWC についての教育ツールが全小中学校に配布されたり、ホテルやレストランへの無料トレーニングを開催したりしたほか、コミュニティーを巻き込んだイベントとして、ラグビー関連や国旗等で装飾した家や道を競わせる、ベスト・ドレス・ストリート大会 (The Best-dressed Street competition) が全国で開催された。こういった草の根レベルから全国民をあげて盛り上げた大会となった。

⁵⁹ 農業、海運、航空産業、ICT、生物科学、クリーンエネルギー、林業、海産物、ワイン、馬、ファッション、音楽、映画、教育、ラグビー、投資

第2章 ラグビーワールドカップによる経済効果

2003年RWCはシドニーオリンピック以来でオーストラリアで開催された最も大きなスポーツイベントとなった。ラグビーは非常に激しい競技であるため、大会期間も長く、それに伴い海外からのサポーターの滞在期間も長くなっている。この章では、定量的なデータがある程度公表されている2003年と2011年の大会を中心とした経済効果について確認していきたい。

なお、ホスト国が異なることなどから、それぞれ独自の手法や観点での分析であり、必ずしも共通するものではない点に留意いただきたい。

第1節 歴代RWCと前後のスポーツイベント等

開催回数を重ねるごとに観客数やテレビ視聴者数が大きくなっている傾向があるRWCであるが、これまで開催されたRWCについては、全てラグビー強豪国で開催されており、自国内での関心も非常に高い。観戦についても、ホスト国が強豪国ひしめくヨーロッパ内である場合、サポーターにとって渡航しやすい環境にある。また、ヨーロッパから離れた南半球のうち、オーストラリア（2003年）とニュージーランド（2011年）での大会の場合は、両国が比較的近く（シドニー・オークランド間は時差を差し引いて正味3時間程度のフライト）、両国ともスポーツの中でラグビー競技が最も人気のあることもあり、双方の大会で互いのサポーターが多く行き来をして海外からの訪問数を押し上げていたことを次節以降のデータが示している。

国外からの訪問客の平均滞在日数は、日本人の感覚では非常に長く感じる部分もあるが、これが大きな経済効果を生んでいる。例えばオーストラリアでは、長期の休暇取得をするビジネスパーソンが多いが、これはワークライフバランスの観点のほか、未消化の有給休暇は（上限なく）繰り越され、退職時には会社側が買取を行う必要もあり、バランスシートの負債に計上されていくため、会社側から取得を促されている面もあるようだ。

2019年大会では、約20万人の訪日客が予想されている。これは2011年大会（ニュージーランド、約13万人）と2015年大会（イングランド、約46万人（大会前見込み））の間である。熱心なサポーターが多い強豪国との日本の地理的な距離や日本国内でのラグビーの人気を考慮すると、これまでのRWCの運営等を踏襲するだけではなく、大会前に日本及び大会の魅力を日本全体総力を挙げて訪日客を呼び込む努力を行い、何かしらの工夫・仕掛けで「おもてなし」していく準備が必要となるであろう。

また、自国の観客も経済にとっては非常に大切なものとなる。日本チームの奮闘は、2015年大会がそうであったように、日本国内での関心の向上に大いに寄与するだろうと考える。

表 2－1 これまでの RWC における観客数等（累計）⁶⁰

	開催年	開催国・地域	観客数 (平均収容率 ⁶¹)	テレビ視聴者数
第 1 回	1987	ニュージーランド、 オーストラリア	60 万人	3 億人
第 2 回	1991	イングランド	100 万人	17 億 5 千万人
第 3 回	1995	南アフリカ	100 万人	26 億 7 千万人
第 4 回	1999	ウェールズ	175 万人	30 億人
第 5 回	2003	オーストラリア	180 万人 (89%)	34 億人
第 6 回	2007	フランス	224 万人 (95%)	42 億人
第 7 回	2011	ニュージーランド	148 万人 (94%)	39 億人
第 8 回	2015	イングランド	247 万人 ⁶² (98%)	－

2003 年大会前に行われた各種世界大会と比較したものは次のとおりである。各項目で、オリンピックや FIFA サッカーワールドカップよりも小さい数字となっている。なお、経済効果の部分について、シドニーオリンピックやサッカーワールドカップはスタジアムの建設など関連するインフラ整備も含まれているため、大きな値となっている。

⁶⁰ URS Finance and Economics (2004)、Ministry of Business, Innovation and Employment (New Zealand)、IRB、Rugby World cup による発表より。現時点で第 8 回大会のテレビ視聴者については情報なし。

⁶¹ 全試合の最大集容人数に対する動員人数の割合（The Stadium of Four Million）

⁶² World Rugby website (RWC 2015 declared biggest and best tournament to date) によると、2,470,000 以上のチケットセールスがあり、大会平均で 98%のチケットセールスがあったという。

表 2-2 2003 年大会前に行われた各種大会との比較

イベント	観客数	国外からの 訪問者 ⁶³	テレビ視 聴者数	GDP への効果 (AUS\$)
2000 年シドニーオリンピック	670 万人	11 万人	300 億人	65 億ドル
2002 年 FIFA WC (日韓)	270 万人	—	288 億人	277 億ドル (日:212、韓 65)
2002 年冬季オリンピック (ソルトレイクシティ)	153 万人	—	21 億人	— ⁶⁴
2003 年 RWC (オーストラリア)	180 万人	6 万 5 千人	34 億人	2 億 8,900 万ドル
2011 年 RWC (ニュージーランド)	148 万人	13 万 3 千人	39 億人	5 億 7,300 万 NZ ドル

オーストラリアで毎年開催されているイベントと比較しても、RWC は経済的な効果が高いイベントとなっている。ただし、全豪オープンテニスや F1 グランプリはメルボルン単独の開催であり、イベントのインパクトとしては大きい。

表 2-3 毎年開催されるオーストラリア内で行われたイベントとの比較等

イベント	観客数	経済需要 (売り上げ等) (AUS\$)
1997 年 全豪オープンテニス (メルボルン)	39 万人	2,500 万ドル
2002 年 F1 グランプリ (メルボルン)	40 万人	1 億 3,900 万ドル
2003 年 RWC (オーストラリア)	180 万人	4 億 9,400 万ドル
2011 年 RWC (ニュージーランド)	148 万人	7 億 8,000 万 NZ ドル ⁶⁵

第 2 節 2003 年オーストラリア大会が経済に与えた影響

2004 年 6 月にコンサルタント企業 URS Finance and Economics が取りまとめ、オーストラリア政府へ報告した内容は次のとおりとなっている。以下、概要をまとめた。
(金額は AUS ドル)

1 チケット販売数

観戦チケットが販売された地域については、次のとおりである。国際的な大会であるものの、オーストラリア国内での販売が 68%を占める。国内では、人口が集積し、

⁶³ シドニーオリンピックは開催前の見込み、FIFA WC 及び冬季オリンピックについては観客に関するデータを見つけれなかった。

⁶⁴ 参照した URS Finance and Economics(2004)にもデータはなし

⁶⁵ 大会前の予測値(新日本有限責任監査法人 IPO センサー2014 年秋号)

試合会場が多い NSW 州でチケットが多く販売された。

表 2－4 チケット売り上げ及び地域について

国外	オーストラリア国内		計
6,300 万ドル (32%)	1 億 3,660 万ドル (68%)	(うち) NSW 州 : 8,540 万ドル VIC 州 : 1,260 万ドル QLD 州 : 2,370 万ドル SA 州 : 380 万ドル WA 州 : 580 万ドル TAS 州 : 60 万ドル NT 準州 : 20 万ドル ACT : 440 万ドル	1 億 9,960 万ドル

2 国外からの訪問者数

RWC を主目的とした国外からの訪問者は 65,000 人と推定されており、内訳として 60,000 人の観客・サポーター、2,500 人のメディア関係者、2,500 人のスポンサー関係者（大部分は RWC のグローバルサポーターやスポンサー法人の管理者）であった。

表 2－5 2003 年大会の国外からの訪問者数（人）

観客・サポーター	メディア関係	スポンサー関係	計
60,000	2,500	2,500	65,000

訪問客の地域別内訳は次のとおり。海外からの訪問者の多くはイギリス／ヨーロッパの地域で、31,794 人（全体の 49%）が訪問した。また、オーストラリアから比較的近いニュージーランド及び太平洋諸国から 15,000 人（全体の 23%）が訪問したことも特筆すべき点である。

表 2 - 6 2003 年大会の国外からの訪問者の地域別内訳（人）

地域	主な国	観客・サポーター	メディア関係	スポンサー関係	計
イギリス／ヨーロッパ	イングランド、アイルランド、スコットランド、フランス、イタリア、ウェールズ	28,200	1,094	2,500	31,794 (49%)
ニュージーランド／アジア太平洋	ニュージーランド、日本、フィジー、トンガ、香港、シンガポール	18,600	813	-	19,413 (30%) うち NZ 等⁶⁶ 15,000 (23%) 日本等 4,413 (7%)
アフリカ	南アフリカ、ナミビア	10,200	438	-	10,638 (16%)
アメリカ	カナダ、米国、アルゼンチン	3,000	155	-	3,155 (5%)
計		60,000 ⁶⁷	2,500	2,500	65,000

このほか、

- ・ 選手及び関係者：約 800 人（1 チームあたり 42 人）（オーストラリアチーム除く）
- ・ 海外からの試合関係者：25 人
- ・ 海外のラグビー関係の VIP：250 人

が訪問した。

3 国外からの訪問者による支出

RWC を主目的とした国外からの訪問者 1 人当たり平均の支出（航空料金、オーストラリア内での支出を含む）は次のとおりである。イギリス／ヨーロッパからの訪問者が、平均 8,302 ドルと最も支出し、かつ平均 36 泊と最も長く滞在している。滞在期間は、大会期間が長いこともあり、平均で 27 泊程度であった全訪問者による総支出は、

⁶⁶ データソースであるカンタス航空と ARU によると、うちニュージーランド及び太平洋諸国が約 15,000 人、日本、香港及びシンガポールが約 4,413 人と推定されている。

⁶⁷ 60,000 人の観客・サポーターのうち、約 40,000 人が RWC パッケージ商品（航空券、ホテル、観戦チケット込）を使って来豪したが、残りの 20,000 人はオーストラリアにいる家族や友人を経由して観戦チケットだけを手に入れたり、航空券と観戦チケットをだけを取得して来豪した。

4 億 4,000 万ドルと見込まれている。

表 2－7 国外からの訪問者による平均旅行支出額⁶⁸

地域	訪問者数 (人)	平均支出額 (ドル)	平均宿泊数 (日)	1 日平均 支出額(ドル)	支出総額 ⁶⁹ (百万ドル)
イギリス、ヨーロ ッパ	31,794	8,302	36	230	256.1
ニュージーラン ド、アジア太平洋	19,413	3,153	15	210	59.2
アフリカ	10,638	6,260	24	260	64.5
アメリカ	3,155	6,741	22	306	20.6
計	65,000	6,354	27	233	400.4

この支出総額の内訳を見ると、パッケージツアー、国際航空チケット、飲食・宿泊や買物に係る経費が特に大きいことが分かる。

⁶⁸ 平均支出額、平均宿泊数、一日平均支出額の各計は、筆者が加重平均により試算

⁶⁹ 海外からの訪問者の中には、家族や友人と過ごすことで消費を抑えることを想定し、その合計支出総額は 1,220 万ドルになると見込んでいる。

表 2－8 海外からの訪問者による支出内容（ドル）

項目	オーストラリア国内での消費相当	国外での消費相当	計
パッケージツアー	56,692,772	21,884,073	78,576,845
既成ツアー	11,753,021		11,753,021
国際航空チケット ⁷⁰	72,600,682	31,114,578	103,715,260
国内航空チケット	2,989,804		2,989,804
レンタカー等	6,082,704		6,082,704
ガソリン代	3,402,190		3,402,190
その他の自動車関係費用	6,028,704		6,082,704
その他の交通機関	8,350,831		8,350,831
買物	45,156,346		45,156,346
飲食・宿泊	87,219,791		87,219,791
ギャンブル	4,845,544		4,845,544
エンターテインメント	6,082,704		6,082,704
情報通信	5,670,317		5,670,317
その他	30,516,617		30,516,617
合計	347,446,028	52,998,651	400,444,679

なお、レンタカー等の支出も一定程度あるが、イギリス、ニュージーランドはオーストラリアと同じ左側通行（右ハンドル）なので、比較的扱いやすい状況にあり、かつ試合日程にも余裕があることにも関係があるだろう。2003 年大会では、アイルランド人サポーターが転戦のためアデレードからメルボルンまでの 1,000km を一週間かけドライブしながら移動したことから、道路沿線の地域ビジネスに大きく貢献したことが語られている⁷¹。

日本も同じ交通ルールであることを踏まえると、2019 年日本大会でも仲間同士でレンタカーを使い移動するような旅行者も多く来日すると思われる。

なお、レンタカーについては、次節のニュージーランド大会でも言及する。

4 国内からの訪問者による支出

ラグビー観戦が盛んなオーストラリアでは、他州からの訪問客も多く、国内の訪問者による経済効果も大きい。最も他州からの訪問客が多かったのは試合数も多い NSW

⁷⁰ 国際航空チケットについて、オーストラリア発着のメインキャリアだったカンタス航空のチケットをオーストラリアの業者から海外の業者へ供給を行った分等を勘案し、70%が国内で購入されたと想定されている。

⁷¹ 新日本有限責任監査法人 IPO センサー2014 年秋号

州で 49,948 人、次いで VIC 州 43,284 人、QLD 州 42,153 人で、この 3 州が多い。消費総額についても同様である。訪問 1 回当たり平均支出額は、人口が集積している東海岸から地理的に離れている西オーストラリア州が高く 1,446 ドル、NSW 州から近い ACT が 566 ドルと試算されているほかは、それほど大きな差はみられない。

表 2－9 他州からの訪問者による効果

A. 試合開催州	B. A の試合について、他州で購入された観戦チケット購入数（枚）	C. 他州からの訪問者数（人）	D. 訪問 1 回当たりの平均支出額（ドル）	D. 他州からの訪問者の支出総額（千ドル）
NSW 州	66,916	49,948	1,015	47,785
VIC 州	61,271	43,284	1,005	41,439
QLD 州	64,216	42,153	705	28,352
SA 州	14,797	7,789	1,007	7,483
WA 州	19,856	9,261	1,446	12,789
TAS 州	1,535	1,535	698	1,014
ACT	27,218	25,760	566	3,764
計	255,808	179,730	-	142,625

※B について：国外訪問客が国内で購入したと考えられる、約 9 % 差し引いている

※C について：訪問者数はチケット数からカウントするが同一週末に複数の試合を観戦する訪問者がいるため、その分を調整している。

※D について：NSW 州が比較的近い ACT で行われる試合を観戦する場合、1 回当たり 188 ドル支出していると想定されている。

5 産業、雇用、財政への影響

（1）経済需要面

RWC 開催によって、4 億 9,400 万ドルの経済需要（売上等）を生み出したと試算されている。各分野への効果をみると、特に小売・ホテル産業、金融・ビジネスサービス、そしてリクリエーション・サービスへのプラスの影響が大きかった。一方で、製造業、鉱業、農林水産業ではマイナスの影響があった。

試合開催が多かった NSW 州、VIC 州及び QLD 州で大半の経済効果を得たが、TAS 州と NT 準州は、小売・ホテル産業、製造業、鉱業でのマイナス効果となった影響で、トータルでもマイナスとなった。

なお、ホテル産業に関連した話として、シドニーオリンピック時の客室稼働率について、シドニーでは開催前と比較して上昇し稼働率 100%を達成している一方で、他都

市ではオリンピック前と比較し下落していたことが分かっている⁷²。

(例：メルボルン△18.6%、ブリスベン△17.0%、アデレード△11.3%)

(2) 雇用面

RWCによって4,500人分の雇用を生み出したが、主に小売、ホテル産業、金融・ビジネス産業、リクリエーション産業であった。この雇用面もNSW州、VIC州そしてQLD州で大部分を占める。

(3) 政府の財政への影響

RWCは経済効果により連邦政府は5,500万ドルの収入を得た(支出も同額)。州政府については、例えば、NSW州は連邦政府からの財政交付金を含め1,900万ドルの歳入があった一方で、RWCへの補助金を含め、歳出が3,400万ドルあったため差し引き1,500万ドルの財政負担が生じた。オーストラリアトータルとしては、1,400万ドルの財政負担が生じたことになる。

表2-10 産業、雇用、財政への効果

	経済需要 (万ドル)	雇用者数 ⁷³ (人)	政府の財政への影響 ⁷⁴ (万ドル)		
			歳入	歳出	財政負担
NSW 州	41,100	3,595	1,900	3,400	1,500
VIC 州	4,800	428	800	700	△100
QLD 州	2,200	303	600	800	200
SA 州	0	27	300	100	△200
WA 州	400	65	300	200	△100
TAS 州	△500	△46	100	-	△100
NT 準州	△200	△16	100	-	△100
ACT	1,600	121	-	300	300
連邦政府			5,500	5,500	-
計	49,400	4,476	9,600	11,000	1,400

⁷² 当協会クレアレポート 「シドニー五輪の概況と波及効果」

⁷³ 雇用の見込み数はフルタイムとパートタイムあわせたもの

⁷⁴ 歳出には連邦政府から州政府への交付金、州からRWCへの補助金支出が含まれる

第3節 2011年ニュージーランド大会が経済に与えた影響

2012年12月にニュージーランド政府（Ministry of Business, Innovation and Employment）によって発表されたレポート「The Stadium of Four Million」によると大会の経済効果等は次のとおりとなっている。以下、概要をまとめた。（金額はNZドル）

ニュージーランドでは、2011年大会開催に際し、入国カード（arrival card）に、渡航目的として、「ワールドカップのため」という質問項目を加え、RWCに関する有益な統計データを取得している。

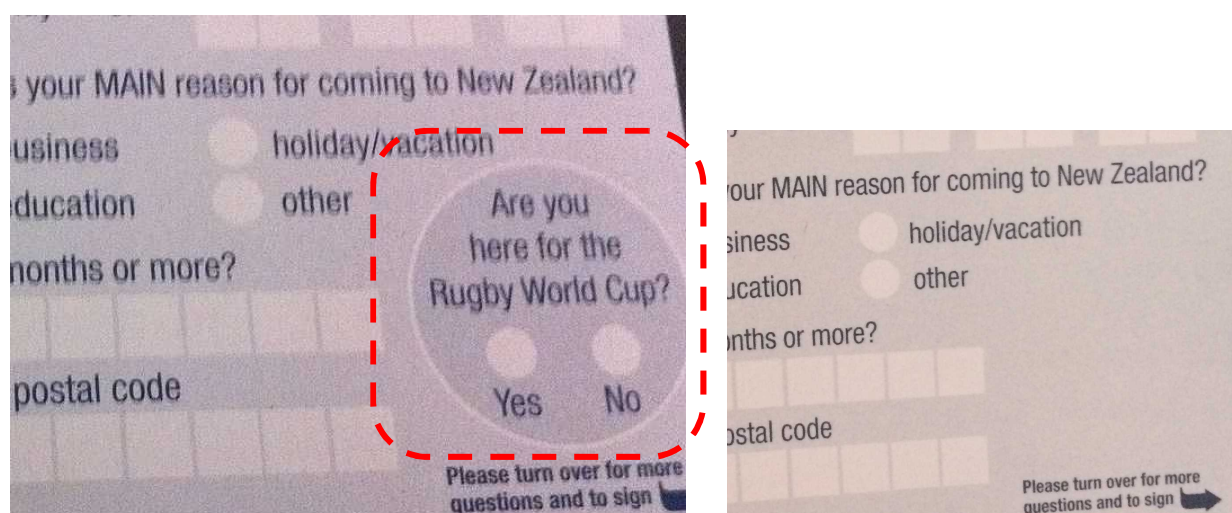


図2-1 当時の入国カード（左）と現在のもの⁷⁵

1 訪問者数

観戦チケットが販売された地域については、次のとおりである。国際的な大会であるものの、ニュージーランド国内での販売が65%を占める。

表2-11 チケット売り上げ及び地域

国外販売	国内販売	その他 ⁷⁶	計
331,801 枚 (22%)	952,000 枚 (65%)	191,887 枚 (13%)	1,475,688 枚

⁷⁵ [写真] 当時の入国カードは <http://habanab.blog.fc2.com/blog-entry-78.html> より、現在のものは筆者撮影（2016年3月）

⁷⁶ 主にコーポレートボックスでの食事等つき観覧パッケージ（Hospitality Package）として販売されたもの。

国外でチケットを購入した訪問者へのアンケートでは、76%の人が RWC のためにニュージーランドを訪問したと回答している。

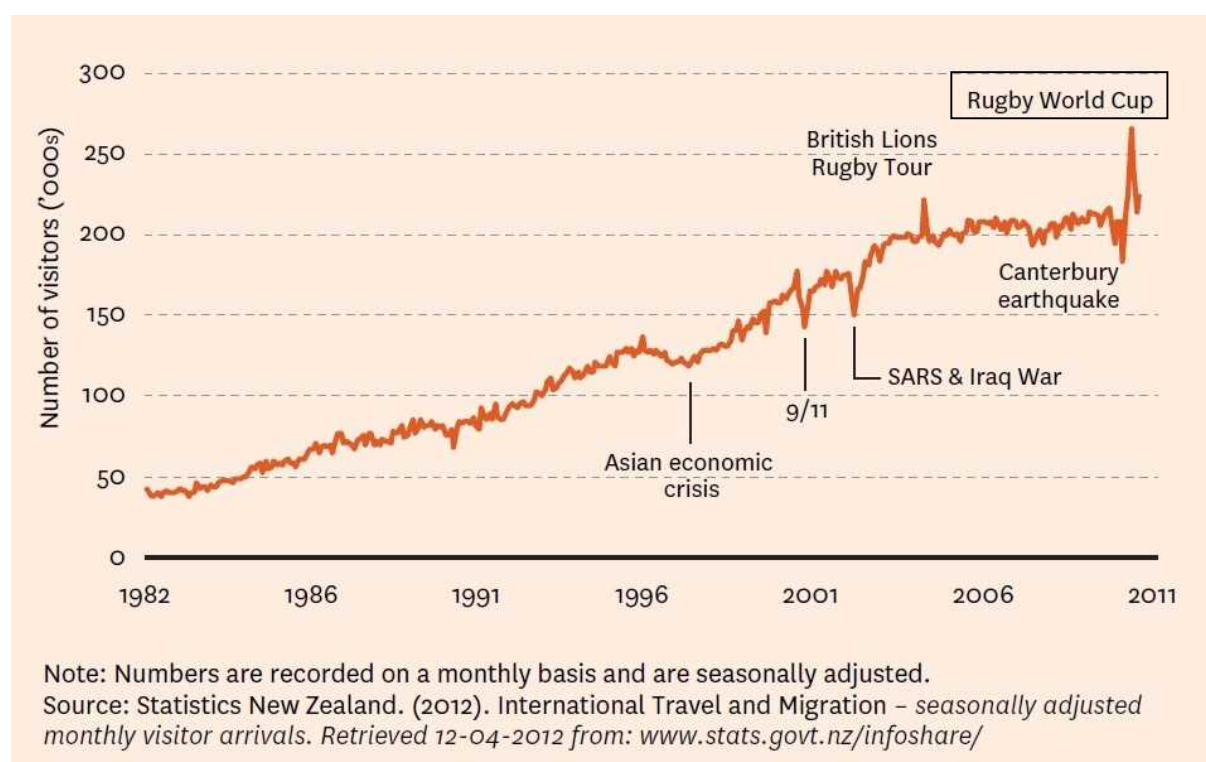
表 2-12 ニュージーランドを訪問した理由

ニュージーランドを訪問した理由	回答のシェア
・ 旅行日程が RWC と一致した	11%
・ 旅行を RWC と一緒に計画した	13%
・ 特別に RWC のために訪問した	76%

2 国外からの訪問者

次の表は 1982 年から 2012 年までのニュージーランドを訪問者の推移であるが、RWC やその他のイベントや出来事での訪問者の増減をよく表している。SARS の流行や 2011 年のカンタベリー大震災による落ち込みがあったが、この RWC での訪問者が一時的に増加したことが分かる。

表 2-13 国外からニュージーランドへの訪問者の推移⁷⁷



RWC を主目的とした国外からの訪問者数は 100 以上の国から 133,200 人と発表されている。入国カードからのサンプル調査から分析された国別訪問者は次のとおりである（この合計数は 133,200 人とは完全には一致しない）。内訳としては、ニュージーラ

⁷⁷ The Stadium of Four Million p42 より

ンドから地理的に近くラグビーの人気が高いオーストラリアからの訪問者が 43%を占めた。続いて、イギリス・アイルランド（17%）、フランス（9%）が続く。また、40%が RWC によって初めてニュージーランドを訪問したという。

なお、オーストラリアからの訪問者には他の国籍の人も多く、63%がオーストラリア人であるものの、それ以外はオーストラリア在住のニュージーランド人、イギリス人、アイルランド人、南アフリカ人、フランス人で多くを占めるとのことであった。

また、平均宿泊日数について、全ての訪問者の平均は 13 日となるが、隣国であるオーストラリアは 8 日である一方で、ヨーロッパ諸国は比較的長い傾向にある。

表 2-14 2011 年大会の海外訪問者の地域別内訳⁷⁸

国	訪問者数（シェア）	平均宿泊数
オーストラリア	55,152 人 (43%)	8 日
イギリス・アイルランド	22,144 人 (17%)	21 日
フランス	11,136 人 (9%)	19 日
南アフリカ	8,336 人 (7%)	13 日
アメリカ	5,312 人 (4%)	15 日
アルゼンチン	2,992 人 (2%)	16 日
日本	2,736 人 (2%)	8 日
カナダ	2,560 人 (2%)	19 日
フィジー	1,440 人 (1%)	20 日
イタリア	848 人 (1%)	17 日
その他	15,440 人 (12%)	17 日
計	128,096 人	13 日

大きなイベントでよくあることであるが、RWC を目的に訪問者が増えている一方で、一般の旅行者の中には RWC が開催されていることから、ニュージーランドへの訪問を控えた人も少なからずいたようである。またニュージーランド国内でも、RWC 観戦のため、海外旅行を控える旅行者もいたため、海外旅行産業への影響もあったようである。こういった RWC とは離れた部分において、ネガティブな影響も生じていたようである。もっとも、国内・国外の旅行者の影響については、その後、時期をずらして出発をすることも十分見込まれることであるから、中期的な視点としては、その影響度合いを正確に測ることは難しい。いずれにしても、RWC のホスト国としては、様々な効果が広い分野にもたらされたのは間違いない。

⁷⁸ 入国カードからのサンプル調査から分析されたデータ。（発表されたデータを基に一部筆者が補足的な試算を行った）

ニュージーランド経済発展省（Ministry of Economic Development）は、国外での観戦チケット購入者からのフィードバックを得て、ニュージーランドでの体験について調査を行った。対象範囲 37,156 人中 33% の 12,259 件の回答を得ているのでいくつか紹介する。

表 2-15 2011 年大会における旅行者からのアンケート結果

質問内容	回答
1 いつの試合を観戦したか	・ 予選プール 51% ・ 決勝トーナメント 21% ・ 予選、決勝トーナメント両方 29%
2 ワールドカップラグビーのために何回ニュージーランドに渡航したか	・ 1 回 88% ・ 2 回 8% ・ 3 回 2% ・ 4 回以上 2%
3 RWC のための旅行で、ニュージーランド内に何泊したか	・ 0-2 泊 3% ・ 3-4 泊 8% ・ 5-6 泊 6% ・ 7-9 泊 8% ・ 10-13 泊 14% ・ 14-16 泊 11% ・ 17-20 泊 14% ・ 21-27 泊 14% ・ 28-34 泊 9% ・ 35 泊以上 13%

3 国外からの訪問者による支出

ニュージーランドの空港で行った、旅行者に対しての聞き取り調査を基にした国際ビジター調査によると、ワールドカップのためにニュージーランドを訪れた大人一人当たり、ニュージーランド国内で平均 3,400 ドル消費したとの結果が出ている（全ての目的で訪問した旅行者が平均 2,400 ドル）。仮に、通常の 15 歳を超える旅行者が全て 3,400 ドル消費したとした場合、おおよそ 3 億 8,700 万ドルを消費したことになるという。

また、海外からの訪問者の滞在日数と消費について興味深い点がある。ニュージー

ランド統計局⁷⁹によると、2011 年 7 月から 9 月までの平均滞在日数は平坦に推移していたが、2011 年 10 月では、全ての訪問者の平均滞在日数が実は 19 日から 16 日へと 3 日減ったという（RWC を目的とした平均滞在日数 13 日というのは一般的な滞在より短い傾向にある）。しかしながら、2011 年 9 月期と 12 月期の国外からの旅行者がもたらす支出総額をみると、前年同期と比較して大きくなっているという。この点を鑑みると、通常年と比較し、短い期間で、多く消費をしていたことがわかるという。これも RWC の影響だと考えられている。

宿泊については、予想以上の訪問者があったにもかかわらず、供給できたとしているが、宿泊施設の稼働率は、地域によって偏りがあったようである。オークランドは満室だった一方で、オークランド以外の地域、特に南島のエリアなどは予想を下回り満室とはならなかった。これは地理的に決勝トーナメントが、オークランドやウェリントンがある北島で行われたことが大きかったと分析している。ホーク湾やノースランドのような北島の地区は、RWC を通じて沢山の旅行者が滞在したようである。

一方、ニュージーランド観光局は、キャンピングカーを利用し、経費をかけずに旅行する旅行者がいることを認識しており、そういった旅行者へ手助けとなるウェブサイトを構築した。

4 産業、雇用、財政への影響

RWC 開催に当たって、2006 年から 2012 年までの期間で、17 億 3,000 万ドルの経済効果があったと見込まれており、この期間の新たな労働力としては、1 年を通じた業務分として換算すると、29,990 人分の雇用を生み出した。そのうち、オークランドでは 7 億 2800 万ドルの経済効果、13,940 人分の雇用を生み出した。また、ウェリントンでの経済効果は 9,400 万ドル以上と見込まれており、ネルソン・タスマン地域の経済効果でも 1,400 万ドルと見込まれている。

スタジアムの整備にも多額の投資がされた。例えば、前章で紹介したオークランドのイーデン・パーク周辺では 2 億 8,000 万ドル（うち 1 億 9,000 万ドルは政府の整備）、ダニーデンでは 1 億 9,800 万ドルが投資された。こういった大掛かりな設備投資は長期間に渡って行われることもあり、RWC に関係する建築物による経済効果を明確にすることは難しいが、こういった大きな事業も、この RWC がなかったら、暫くは行われなかったであろうとしている。

地方政府とスタジアムが別組織であるオークランド以外の試合開催地域における主な経済負担は、地方政府が実質的に賄ったものであった。RWC に向けた地域組織は一般的に、地方の観光局、経済関係機関、ラグビー協会、スタジアム、地方政府等により成り立っているが、ほとんどの地域のスタジアムやトレーニング施設は、全て地方政府が所有していたもので、概ね全てのコストは、地方政府の予算から賄われていた。

⁷⁹ Statistics New Zealand, Impact of the Rugby World Cup in New Zealand's macro-economic statistics

第3章 オーストラリアにおけるラグビーの人気と競技の種類

オーストラリアとニュージーランドでは、ラグビー観戦が盛んであり、両国で最も人気のあるスポーツである。両国のワールドカップ開催時の盛り上がりは、両国の国民的人気も下支えしている部分も考えられ、この章では、オーストラリアにおける人気の高さを紹介する。

ラグビーに関連したスポーツ競技として、オーストラリアでは大きく分けて、ラグビー・ユニオン、ラグビー・リーグのほか、オーストラリアン・フットボールが行われているので後ほど説明する。

第1節 スポーツ観戦と活動

1 スポーツ観戦

オーストラリア国民の15歳以上の43%（760万人）以上が、ここ12ヶ月以内にどういったスポーツイベントの観戦をしたかという統計がある⁸⁰。代表的な4つの州におけるラグビーへの観戦参加率も併せてみていきたい。

表3-1 オーストラリアでの主なスポーツ観戦者数

スポーツ	観戦者数（観戦参加率）（代表的な州の場合）
オーストラリアン・フットボール	2,832万人（16.2%） (NSW:4.1%, QLD:6.1%, VIC:32.5%, SA:30.3%)
競馬	1,940万人（11.1%）
ラグビー・リーグ	1,564万人（8.9%） (NSW:14.2%, QLD:17.2%, VIC:1.7%, SA:0.6%)
モータースポーツ	1,423万人（8.1%）
サッカー	939万人（5.4%）
クリケット	679万人（3.9%）
ラグビー・ユニオン	576万人（3.3%） (NSW:4.4%, QLD:4.0%, VIC:1.2%, SA:0.7%)
ハーネスレース（馬車競馬）	412万人（2.4%）
テニス	294万人（1.7%）

ラグビーに関して、州ごとにばらつきがある。例として幾つかの州を見てみると、オーストラリアン・フットボールはVIC州及びSA州で圧倒的な人数がある一方で、NSW州及びQLD州はラグビー・リーグの観戦が盛んである。これは、オーストラリアン・ラグビーリーグ（以下、AFL）やナショナル・ラグビー・リーグ（以下、NRL）

⁸⁰ オーストラリア統計局 Spectator Attendance at Sporting Events （2010年）より

のホームチーム等や試合開催があることにも関連していると思われる。ラグビー・ユニオンに関しては、ラグビー・リーグよりも少ない観戦参加率となっている。なお、ラグビーのテレビ放送について、AFL、NRL の試合はテレビ地上波で無料放送されることもあるが、後述のユニオンのプロチームの試合である Super Rugby は基本的に有料放送となっている。

関連する話であるが、長年のラグビー・ユニオンファンを自負するシドニー（NSW 州）在住のオーストラリア人に話を聞くと、ラグビー・ユニオン、ラグビー・リーグ、オーストラリアン・フットボールのファンは基本的にそれぞれ分かれており、例えばラグビー・ユニオンのファンは、ラグビー・リーグの試合にそれほど関心がないなど、複数の種類のラグビーを好んで観戦するというファンは少数であるとのことである。本人自身、（NSW 州のデータどおり）オーストラリアン・フットボールにはあまり興味がないとのことであった。しかしながら、一般的に、ラグビー・ユニオンのオーストラリア代表チーム（ワラビーズ）の試合は、国代表チームなので、ラグビー・ユニオンのファンに限らず、他のラグビーファンも大いに関心を示すようである。

また、興味深いことに、ファンのバックグラウンドも若干異なる傾向があるという。オーストラリアのプライベートスクール（私立の進学校）では英国の伝統を受け継いだ教育制度を取り、体育の時間には、ラグビー・ユニオンを熱心に行わせることが多い。そのことから、ラグビー・ユニオンのファンは、プライベートスクールの卒業生を中心としたビジネスエリート・高所得者が多い傾向があるという⁸¹。

なお、ラグビーのオフシーズン（夏季）に行われるクリケット⁸²については、大方の男子小学生が経験することから、ラグビーの種類の嗜好を問わず、クリケットが好きだというラグビーファンも多いようである。

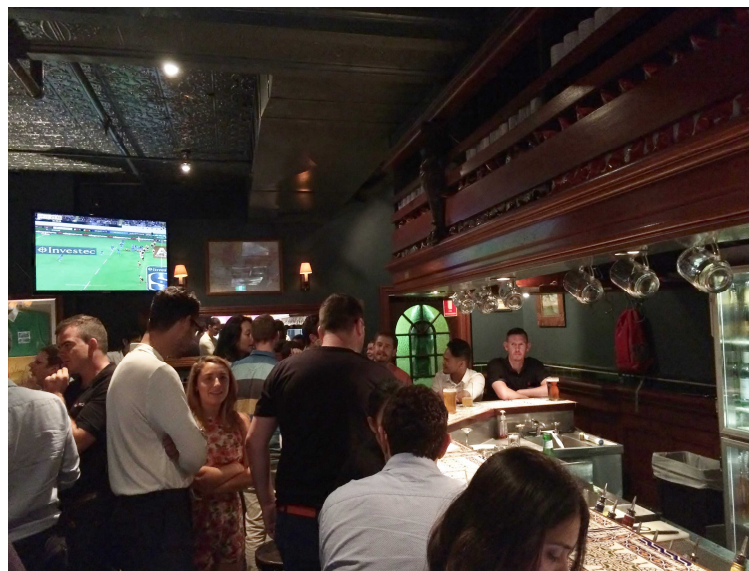


図 3 - 1 シドニー市内のパブの様子⁸³

⁸¹ このファンのバックグラウンドの話について、定量的な根拠を見つけることはできなかったが、同様の話は色々なオーストラリア人からよく聞く。

⁸² 野球の原型と言われ、英国文化圏（イギリス、オーストラリア、インド等）で盛んな球技。

⁸³ [写真] 筆者撮影（2016 年 3 月） 店内のテレビ放送はラグビーかクリケットが中心。

2 運動・スポーツ活動

一方で、15 歳以上の男性について、ここ 12 ヶ月以内にどういった運動を行ったかという統計をみると、66.2%が何らかの運動を行っているが、具体的には、ウォーキング、フィットネス／ジム、サイクリング、ジョギングの順で運動を行っている人が多かった。ラグビーは上位 10 位には入ってこなかった。

なお、5 歳から 14 歳までの男性の場合では、サッカー、水泳、オーストラリアン・フットボールの順だった。大人になってからは、一般的にはラグビーは見て楽しむスポーツのようである。

表 3－2 オーストラリア人男性が行っている運動の上位 10 種目⁸⁴

(15 歳以上の男性)		(5-14 歳の男性)	
運動の種類	実施率	運動の種類	実施率
運動としてのウォーキング	16.5%	サッカー	21.7%
フィットネス／ジム	15.1%	水泳	16.5%
サイクリング	9.8%	オーストラリアン・フットボール	14.9%
ジョギング	8.7%	バスケットボール	9.2%
ゴルフ	8.2%	クリケット	8.6%
水泳	7.5%	テニス	8.4%
テニス	4.9%	格闘技	7.8%
サッカー	4.1%	ラグビー・リーグ	7.5%
クリケット	3.0%	ラグビー・ユニオン	4.0%
バスケットボール	2.8%	ダンス	3.5%



表 3－2 クリケットの試合の様子⁸⁵

⁸⁴ オーストラリア統計局 Spport and recreation: A statistical overview. Australia (2012 年)

⁸⁵ [写真] The Herald

第2節 オーストラリアで行われているラグビー競技の種類

ここでは、オーストラリアで行われているラグビーについて説明する。ここでは、ラグビー・ユニオン、ラグビー・リーグ、そしてオーストラリアン・フットボールについて解説を加える。それぞれのプロリーグによって多少期間は異なるが、概ね2月下旬頃から10月上旬頃の秋から冬にかけて行われている。



図3-3 シドニー中心部ムーアパークに位置するスタジアム⁸⁶
(左がAllianz Stadium、右がSydney Cricket Ground)

1 ラグビー・ユニオン

(1) 歴史 (第1章第1節参照のこと)



図3-4 2003年大会の会場にもなったAllianz Stadium⁸⁷

(RWC 当時は Aussie Stadium という名称)

⁸⁶ [写真] Dairy Telegraph Website, Gregg Porteous

⁸⁷ [写真] 筆者撮影 (2016年2月)

(2) 主なルール

15 人ずつ 2 チームが楕円形のボールを奪い合い、相手のゴールラインに内の地面にボールをつけるか (トライ)、またはペナルティーキックなどによって得点を争う。

日本へは 1899 年イギリスの E.B.クラークと田中銀之助によって初めて紹介され、1926 年日本ラグビー蹴球協会 (のちの日本ラグビーフットボール協会) の設立をみた。

(3) 代表的な国内試合

オーストラリア、ニュージーランドをはじめ南半球のチームを中心とした、「スーパーラグビー (Super Rugby)」が最高峰のプロリーグ。RWC に参加しているオーストラリア代表選手も多く所属している。TV 中継は有料放送が中心だが、オーストラリア代表の国際マッチは地上波無料放送が多い。

【Super Rugby 参加チーム (18 チーム) (主なホームスタジアム)】

NSW 州	ワラターズ (Allianz Stadium)
VIC 州	リーベルス (AAMI Park)
QLD 州	レッズ (Suncorp Stadium)
WA 州	ウェスタンフォース (nib Stadium)
ACT	ブランビーズ (GIO Stadium)
NZ	ブルース (Eden Park/Auckland)
	チーフス (FMG Stadium Waikato/Hamilton)
	ハリケーンズ (Westpac Stadium/Wellington)
	クルセーダーズ (AMI Stadium/Christchurch)
	ハイランダーズ (Forsyth Barr Stadium/Dunedin)

上記のほか、アフリカ・カンファレンスに 8 チーム所属

2 ラグビー・リーグ

(1) 歴史

ラグビー・リーグが生まれた発端には、ラグビー・ユニオンのアマチュア主義が関係している。1871 年、イギリスの 21 のクラブによって、ラグビー・ユニオンの組織であるラグビー・フットボール・ユニオン (Rugby Football Union、以下 RFU) が結成された。当時ラグビーの試合は土曜日に行われることがほとんどであったが、炭鉱労働者が多い北部の選手にとっては勤務日であり、仕事を休まざるを得なかった (一方、南部の選手は比較的裕福で土曜日は基本的に休日)。そのため、北部のラグビークラブは、選手に対しラグビーをプレーするための休業補償を RFU に提案したが、決裂。これが契機で RFU を脱退し、1895 年にノーザン・ラグビー・フットボールユニオン

(Northern Rugby Football Union⁸⁸、以下 NU) が結成された。これがいわばラグビー・ユニオンのライバルであるラグビー・リーグの発祥となった。

NUはルール面でも変更を加え、安全確保や試合展開のためラインアウト、ラックやモール等といったルールを廃止した。更には、チームメンバー数を13人に減らし、タックル数も制限し攻守交代する。ラグビーをよりスピーディーなスタイルとし、観客もより楽しめるようになり、競技人口、観客数を増やしていった⁸⁹。同様に、オーストラリアでも、やはり金銭面の理由からラグビー・ユニオンから独立し、1908年に初めてNUのルールを適用したラグビー・リーグの競技がNSW州でスタートした⁹⁰。

(2) 主なルール

前述のとおり、ラグビー・ユニオンをベースにスピーディーな試合展開等となるようにルールの変更がされている。ラック、モール、ラインアウトはない。

ラグビー・ユニオンより少ない1チーム13人で戦い、攻撃側と防御側に分かれる。攻撃側は、6回の攻撃を連続で行う(相手からのタックルなどでゲームが止まるまでが1回の攻撃)。相手にボールを取られない限りこの6回の攻撃の間にトライを目指す(その後攻守交代を繰り返す)。タックルを受けたプレーヤーは、ボールを足下に置き、足で後方へ転がすことによってプレーが再開される。

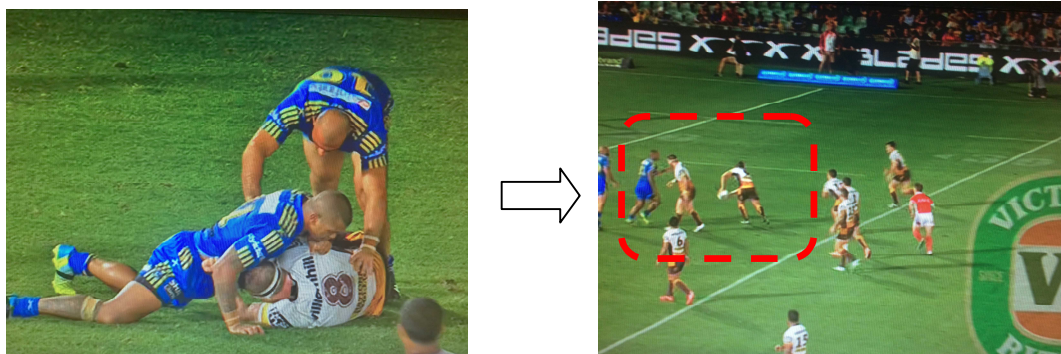


図3-5 タックルされた後、起き上がってその場から再開⁹¹

(3) 代表的な国内試合

NSW州やQLD州のチームを中心とした、「ナショナル・ラグビー・リーグ (NRL)」がオーストラリア内で最高峰のプロリーグ。NRLのステート・オブ・オリジン (NSW州選抜とQLD州選抜の代表戦) も人気である。試合中継は地上波放送(無料)もされる。

⁸⁸ 1922年、ラグビー・フットボール・リーグ (Rugby Football League) に改称。

⁸⁹ 日本ラグビーリーグ協会 website

⁹⁰ National Museum Australia website (League of Legends)

⁹¹ Channel Nine の NRL 中継より

【NRL 参加チーム（16 チーム）（主なホームスタジアム）】

NSW 州	カンタベリー・バンクスタウン・ブルドッグス (ANZ Stadium) サウスシドニー・ラビトーズ (ANZ Stadium) セントジョージ・イラワラ・ドラゴンズ (ANZ Stadium) ウェスツ・タイガース (ANZ Stadium) シドニー・ルースターズ (Allianz Stadium) パラマッタ・イールズ (Pirtek Stadium) クロナラ・サザランド・シャークス (Shark Park) マンリー・ワリング・シーイーグルス (Brookvale Oval) ペンリス・パンサーズ (Pepper Stadium Penrith) ニューカッスル・ナイツ (Hunter Stadium)
VIC 州	メルボルン・ストーム (AAMI Park)
QLD 州	ブリスベン・ブロンコス (Suncorp Stadium) ゴールドコースト・タイタンズ (Cbus Super Stadium) ノースクイーンズランド・カウボーイズ (1300SMILES Stadium)
ACT	キャンベラ・レイダース (GIO Stadium)
NZ	ウォーリアーズ (Mt Smart Stadium/Auckland)

3 オーストラリアン・フットボール

（1）歴史

オーストラリアン・フットボールは、オージールールズとも呼ばれる。VIC 州を中心にクリケット選手のオフシーズンのトレーニングとしてラグビーを基にルールが作られ、1858 年からプレーされるようになった。ラグビーと違って、グラウンドは楕円形となっているのが特徴の一つ（クリケットの試合は楕円形のグラウンドで行われる）。

（2）主なルール

ボールはラグビーボールと同じ楕円形だが、一回り小さい。グラウンドの両端にはそれぞれ 4 本のゴールポストが立っており、ボールを蹴り込むことで得点となる。ボールをキックや掌で叩くようにするハンドボールでパスをして前に進める（前にパスをしてもよい）。1 チーム 18 人で戦う。4 クォーター制で試合が行われるのもラグビーと異なる点。

ゴールポストに
ボールを蹴りこ
むことで得点と
なる

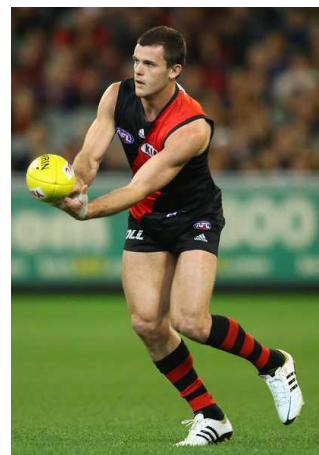


図 3 - 6 試合会場の楕円形のグラウンドとハンドボールでのパス⁹²

(3) 代表的な国内試合

VIC 州のチームを中心とした、「オーストラリアン・フットボール・リーグ (AFL)」がオーストラリア内で最高峰のプロリーグ。試合中継は地上波放送（無料）もされる。

【AFL 参加チーム (18 チーム) (主なホームスタジアム)】

NSW 州	シドニー・スワンズ (Sydney Cricket Ground)
	グレーター・ウェスタンシドニー・ジャイアンツ (Spotless Stadium)
VIC 州	コリングウッド・マグパイズ (Melbourne Cricket Ground)
	ホーソン・ホークス (Melbourne Cricket Ground)
	メルボルン・デーモンズ (Melbourne Cricket Ground)
	リッチモンド・タイガース (Melbourne Cricket Ground)
	エッセンドン・ボンバーズ (Etihad Stadium)
	ノースメルボルン・カンガルーズ (Etihad Stadium)
	カールトン・ブルーズ (Etihad Stadium)
	セントキルダ・セインツ (Etihad Stadium)
	ウェスタン・ブルドッグス (Etihad Stadium)
	ジロング・キャッツ (Simonds Stadium)
QLD 州	ブリスベン・ライオンズ (The Gabba)
	ゴールドコースト・サンズ (Metricon Stadium)
SA 州	アデレード・クロウズ (Adelaide Oval)
	ポートアデレード・パワー (Adelaide Oval)
WA 州	フリーマントル・ドッカーズ (Domain Stadium)
	ウェストコースト・イーグルス (Domain Stadium)

⁹² [写真] (左) Sydney Cricket Ground (筆者撮影) (2015 年 9 月)、(右) 一般社団法人日本オーストラリアンフットボール協会 website

参考文献

- Department of Industry, Tourism and Resources / Australia, URS Finance and Economics, *Economic Impact of the Rugby World Cup 2003 on the Australian Economy - Post Analysis* (2004 年 6 月)
- Australian Bureau of Statistics, *Rugby World Cup 2003 – the short-impact on the Australia economy* (2005 年 1 月)
- Ministry of Business, Innovation and Employment / New Zealand, KPMG, *The Stadium of Four Million* (2012 年 12 月)
- Statistic New Zealand, *Impact of the Rugby World Cup in New Zealand's macro-economic statistics* (2012 年 4 月)
- David Green, *1987 Rugby World Cup*, NZHistory.nz team (Ministry for Culture and Heritage / New Zealand) (2012 年 12 月)
- Australian Bureau of Statistics, *Spectator Attendance at Sporting Events, 2009-10* (2010 年 12 月)
- Australian Bureau of Statistics, *Sport and Recreation: A Statistical Overview. Australia* (2012 年 12 月)
- Lance Peatey, *A complete History of the Rugby World Cup*, New Holland Publishers Pty Ltd (2015 年)
- John McCrystal and Lindsay Knight, *Eden Park a history*, Phantom House Books Ltd (2011 年)
- World Rugby <http://www.worldrugby.org/>
- 2019 All For Japan Team <http://2019-all-for-japan-team.jp/>

その他、本文欄外にも表示した。

おわりに

オーストラリアで生活をしていると、好むと好まざるとに関わらず、ラグビー関連のテレビ番組、街中の広告、新聞のスポーツ面のメイン記事など、何らかの形でラグビー関連の情報が目に飛び込んでくることが多い。実際にスタジアムに足を運びユニオン、リーグ、オーストラリアン・フットボールという代表的な3つのラグビーの試合をすべて観戦したりもしたが、オーストラリア人にとって、日本における野球やサッカーに近い存在ではないかと感じた。

オーストラリア人はオーストラリアという国とスポーツが大好きで、各種スポーツのオーストラリア代表選手、そして代表選手が着用するグリーン&ゴールドカラーのユニフォームに強い誇りを持っている。ワラビーズももちろんその一つである。

また、ニュージーランドでも、オールブラックスのレプリカユニフォームがよく当地のお土産として売られているほか、ニュージーランド航空の離陸時の安全ビデオ映像にもオールブラックスのメンバーが出演するなど、オールブラックスはまさに国民を代表する存在である。

オーストラリアとニュージーランド。普段は兄弟のようなこの両国も、ラグビー代表マッチとなればライバル心むき出しの熱い戦いが繰り広げられ、人々は熱狂する。

情熱をもって積み重ねられてきた RWC の歴史を遡ると、ラグビー・ユニオンのアマチュア主義とプロ化の話は避けられない。関連してユニオンとリーグなどラグビーの違いにも言及する必要があると感じた。このレポートを参照していただければ、RWC の歴史を軸に、オセアニア地区におけるラグビー事情について、ほんの表面的なものではあるが、理解できる内容を目指したつもりである。

約 30 年の歴史を紐解く当地の数少ない文献や薄れゆく人々の記憶を頼りながら、何とか一つの形にすることができた。本レポート執筆のために御協力いただいた関係者の方々に心より御礼申し上げる。

【執筆者】 シドニー事務所所長補佐 清野 浩輝（青森県派遣）